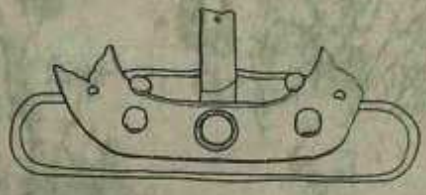
特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

1992



福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

上　第77・78次調査全景　　下　第78次出土鍛形台

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡

1992

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

序　　文

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業も、福井県が昭和47年４月朝倉氏遺跡調査研究所を設立し、本格的に着手してから丁度20周年になります。これまで城戸ノ内の主要な遺構である館や一族の屋敷、庭園、武家屋敷、町屋、寺院、城戸などの跡を調査し、戦国時代の城下町の実態にかなりせまることができました。

現在朝倉館跡の西方の平井・川合殿地係では、町屋や武家屋敷の門・塀などを復元し、城下町の町並を再現する工事が進められています。整備に関連して、また整備後の利用上からもこの一画の未発掘の武家屋敷跡を調査することにしました。平井地係の「ショーゲドン」と通称される武家屋敷跡の南側にあたります。

この地区では、西側の山地を背にして有力家臣の武家屋敷跡が並んでいますが、後世の水田造成の際に西側の屋敷跡を削平し、東方の一乗谷川側に敷きならしているようで、遺構の残存状況はよくありません。遺物では出土例のすくない鍬形台や和鏡などが出土し、重臣の屋敷であったことが窺われます。

本年度の環境整備事業の町並み立体復元に関する概報は、後ほどまとめて報告することとし、今回は掲載しないことにしました。

最後になりましたが、事業の実施にあたり文化庁はじめ関係各位の皆様、地元の方々には大変お世話になりました。心から厚くお礼申し上げます。

平成５年３月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長　藤　原　武　二

例　　言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成４年度に実施した国庫補助事業の発掘調査の概要報告である。
2. 平成４年度は、発掘調査中期10ケ年計画の６年目にあたり、本書には第77・78次調査（川合殿地係）並びに現状変更に申請に伴う事前調査１件（79次調査、火葬場参道砂利敷工事）の概要を収録した。
3. 遺構平面図作製にあたっては国土座標系Ⅵを基に朝倉氏遺跡内に設置した基準点によった。
4. 本書作製にあたっては、館長藤原武二の指導のもとに館員全員が討議検討を行ない、岩田隆が編集を担当した。執筆分担については文末に名を記して文責とした。

目　　次

巻首図版

序文

例言　　頁

Ⅰ　平成４年度の調査概要 …… 1

Ⅱ　第77次調査遺構 …… 3

　　遺物 …… 8

Ⅲ　第78次調査遺構 …… 12

　　遺物 …… 15

Ⅳ　第79次調査 …… 18

図版

　第77次調査遺構 …… PL. 1

　　遺物 …… PL. 4

　第78次調査遺構 …… PL. 8

　　遺物 …… PL.11

1.　平成４年度の調査概要

本年度は「発掘調査・環境整備事業中期10カ年計画」の第６年次の調査として、福井市城戸ノ内町字川合殿地係の約2600㎡について実施した。「ふるさと歴史の広場」事業に伴う事前調査である。調査地区は、ちょうど武家屋敷２区画分にあたり、前半と後半の２次に分けて調査を行った。前半を77次、後半を78次調査とした。調査期間は、77次調査は４月１日から８月７日まで、78次調査を８月14日から12月25日までであった。11月12日に写真測量のためのヘリコプターによる航空写真撮影を行い、12月10日まで77・78次調査の補足調査をした。さらに12月25日までは遺構保存のための埋め戻しを行い調査を終了した。調査結果は、屋敷の規模は土塀の基礎がよく残っていたので明確であったが、内部の遺構の残存状態はあまり良くなく、屋敷の構成を検討するまでにはいたらなかった。

現状変更に伴う調査としては、４月25日から連休を挟んで５月10日まで、城戸ノ内町字「吉野本」地係にある火葬場進入路の舗装工事に伴う事前調査を実施した。調査の結果、石垣の一部が検出されたが、非常にせまい範囲だったので、この石垣がどのような性格なのかは不明である。

また、特別史跡指定区域外ではあるが、県道美山鯖江線の改良工事に伴う調査を２カ所に付いて実施した。１カ所は福井市安波賀町4-10資料館前、もう１カ所は福井市東新町小林谷である。２カ所とも当然「一乗谷」の範囲内に含まれるので、福井土木事務所と協議の上、11月10日から12月23日の約40日間調査を実施した。安波賀町の調査地区では、足羽川の洪水で遺構が流されたのか、もともと足羽川の河川敷きだったのか、遺物は極小量見られたが、遺構は全くわからなかった。東新町の調査地区は、第28次調査地区の南にあたる。この調査では28次調査地区で見つかった壕の続きが検出できた。しかし、この付近はかって圃整備が行われたところであるので、壕以外の遺構は不明である。

調査次数	現状変更箇所	調査期間	面積	現状変更の理由
77 次 78 次	城戸ノ内町字河合殿	４月１日～８月７日 ８月10日～12月25日	2,600㎡	町並立体復元工事に伴う調査
79 次	城戸ノ内町字吉野本	５月６日～５月15日	120㎡	火葬場参道改修工事に伴う事前調査

調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査の理由
80 次	安波賀町字水窪	11月10日～11月19日	495㎡	県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査（受託事業）
81 次	東新町字小林谷	11月19日～12月23日	330㎡	県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査（受託事業）

環境整備箇所	期間	整備事業
城戸ノ内町川合殿・平井	５年３月31日	「史跡等活用特別事業」による町並み立体復原事業

遺物保存処理	4月1日～5年3月31日	鉄製品400点　銅製品200点　木製品350点

第１図　位置図

II．第77次調査

この調査地区は一乗谷川の西岸に位置し、八地谷と上城戸のほぼ中間にある。この川合・平井地区は間口30ｍを基準とする武家屋敷が並んでいたところで、有力武将名が小字名として残っている。第77次調査地区はその武家屋敷群の一つである。春日神社所蔵の「一乗谷古絵図」では、調査地区付近に「朝倉角三吾跡」と書かれており、この屋敷の西南に位置する谷は「三吾谷」と称されている。なお、この屋敷は第54次調査地区の南、第29次調査地区の西に隣接する。

遺　構（PL.1～3）

本調査地区は間口30ｍ、奥行約40ｍの武家屋敷で、町割り以降の遺構面を２～３面確認でき、さらに町割り以前の遺構面を一部ではあるが確認できた。しかし、後世の削平が著しく、発掘された主な遺構は各遺構面合わせて石敷建物１、土塀基礎２、門１、井戸２、石組遺構７等にすぎず、またこれらの遺構に関連がないことからこの屋敷の構成を復元することは困難である。以下遺構面ごとに記述する。

Ｉ遺構面（これまで通り発掘された順にすなわち上からＩ遺構面・II遺構面と呼ぶ。）

Ｉ遺構面は、調査地区の東側大部分が砂利敷を叩き締めた面で覆われており、遺構面の確認そのものは容易であった。しかし、この砂利敷面より下に掘り込まれている遺構は残っていたが砂利面より上に存在したはずの建物遺構などは一部をのぞいて削平されていた。

ＳＡ980　屋敷の東を限る南北方向の土塀基礎（土塁）である。長さ26ｍ、幅は門ＳＩ1083より北が1.2ｍ、南は1.8ｍを測る。屋敷の外側には大石を使用しているが、内側の石は小さい。遺構の残存状況はあまりよい方ではなく、１～２段しか残っていない。また、畦として使用されていたため当初の石とは異なった石が積まれている場合もある。土塀の基礎とした場合、土塀は外いっぱいに造り、土塀の幅は45cmと推定されるので、検出された内側の石列は言葉としては正確ではないが「武者走り」と考えられよう。なお北の屋敷とはＳＡ3310（第54次調査で確認済み）で区画される。

ＳＩ1083　土塀基礎ＳＡ980に北隣の屋敷から7.5ｍの位置に開き、間口４ｍを測る。道路ＳＳ976 からは一段上がる。礎石は一部動かされていてはっきりしないところもあるが、おそらくすでに復元されている門と同じく薬医門であろう。

ＳＡ4127　南屋敷との境界をなす東西方向の土塀基礎である。規模は長さ40数ｍ（山裾の位置が旧農道と水路で確認できないため）、幅1.2ｍを測る。本屋敷側が低いためか石垣は

径50cmを越す大きい石材が使用されている。ただ山側６ｍ分は削平されたためか両側とも石が残っていない。この土塀基礎ＳＡ4127と北側の土塀基礎ＳＡ3310とはほぼ平行であるが、この土塀基礎ＳＡ4127が東から12ｍのところで北に10度振れている。ＳＡ3310とＳＡ4127との間隔は30ｍであるが、この振れのためこの屋敷の間口が先述したように26ｍになっている。

ＳＢ4129　屋敷南西隅に位置する石敷建物で、東西4.2ｍ、南北4.2ｍの方形建物である。北側と東側の石敷が一部失われているがほぼ完全に残存している。四周の石の内側の面が揃っている。使用されている石は、そのほとんどが河原石である。これに類する建物としては、第25次調査のＳＢ903・第68次調査のＳＢ3840などがある。これらの建物を倉庫と考えている。

ＳＥ4321　屋敷の中央北よりに位置する石積井戸である。直径1.2ｍ、深さ3.2ｍを測る。底に井戸枠は存在しなかった。この井戸を中心に３ｍ四方は非常によく叩き締められた砂利敷面となっており、水に対する備えとして施されたものであろう。この井戸底からは石製の井戸枠のほか越前焼など多数の遺物とともに炭灰が出土した。井戸ＳＥ4131の砂利敷の北と西を取り巻くように溝ＳＤ4178がある。この溝は本来石組溝であったのかも知れないが、もしそうだとすればごく一部の石をのぞいてすっかり取り除かれている。内部は焼土が詰まっていた。このほかに屋敷北西隅に石積井戸ＳＥ4137がある。この井戸は直径が60cmしかなく、１ｍの深さまでしか発掘できなかった。

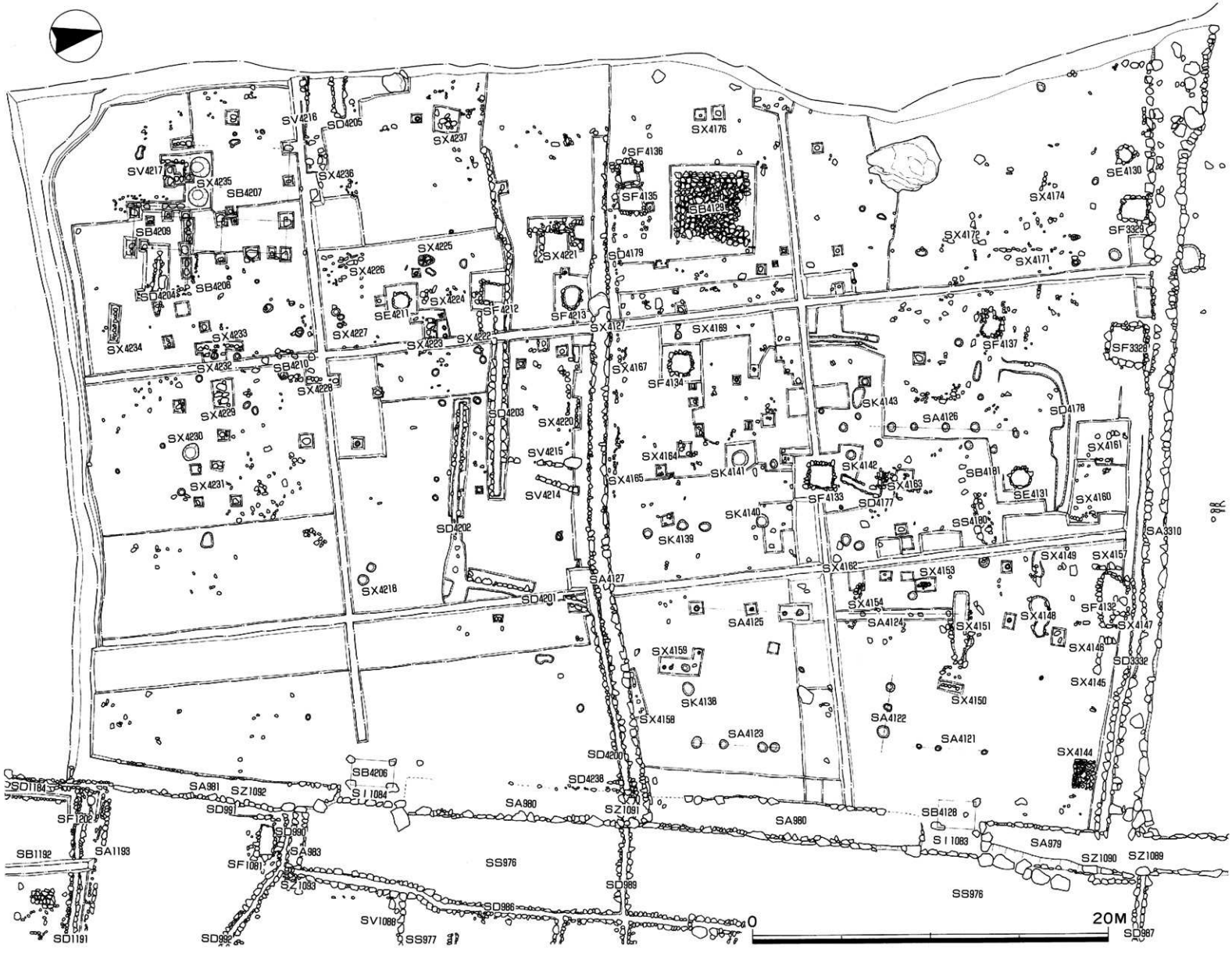
ＳＦ3328・3329　北の土塀基礎ＳＡ3310に沿って並ぶ石積遺構で、北面の石積みは土塀基礎を共有している。ＳＦ3328が２ｍ×1.8ｍに深さ1.0ｍ、ＳＦ3329が少し小さく1.2ｍ×1.5ｍに深さ1.0ｍを測る。石積遺構ＳＦ4132は同じくＳＡ3310に沿っているが、ＳＡ3310の側溝ＳＤ3332の下層から発掘された。さらにＳＦ3329の底にＳＸ4147がある。井戸のように見えるが見えている石だけで積み重なってはいない。

ＳＦ4133　屋敷のほぼ中央に位置する石積遺構で、規模は1.2ｍ×1.2ｍ、深さ0.5ｍと比較的浅い。中は粘土質の山土が詰まっていた。

ＳＦ4134　屋敷の南より中央に位置する石積遺構で、規模は1.0ｍ×1.0ｍ、深さ0.6ｍである。中は焼土が詰まっていた。

ＳＦ4135・4136　屋敷の南西隅に位置する石積遺構で、２基並んでいるが、ＳＦ4135の西壁を取り込む形でＳＦ4136が造られている。規模は、ＳＦ4135が1.4ｍ×1.3ｍ、深さ0.4ｍ、ＳＦ4136がやや小さく1.0ｍ×1.0ｍ、深さ0.4ｍである。

ＳＸ4124　門から約10ｍ入った位置にあり、礎石のような石が４石並ぶ。ただそれぞれの石は等間隔ではないが、柵のような性格を想定している。このＳＸ4124の南には柱穴が３



第2図　第77・78次調査遺構全測図

基直線的に並ぶ(ＳＸ4125)。これも柵列と考えている。

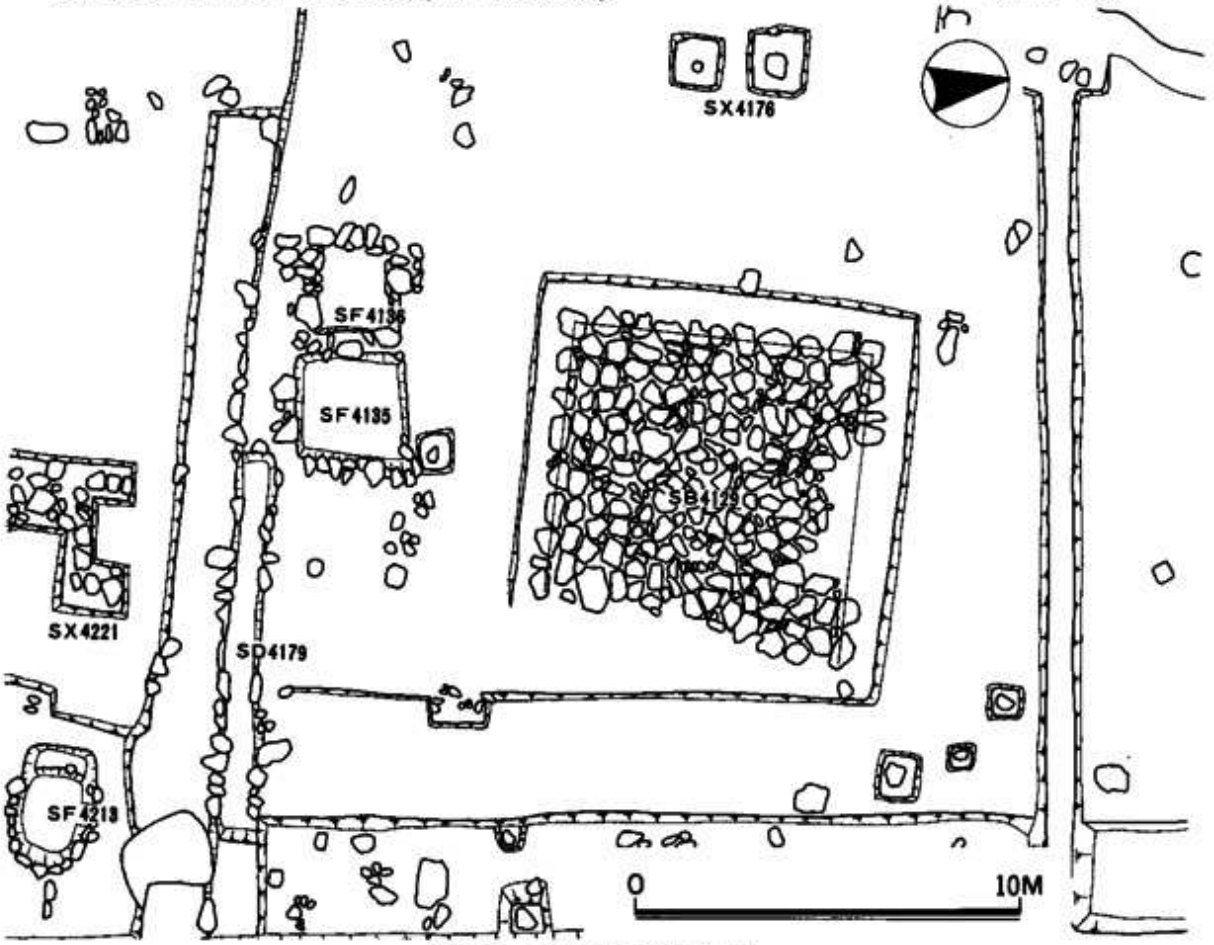
ＳＤ3332　北側の土塀基礎に沿った石組の溝である。東から23ｍ分が残存していた。これより西は不明であるが、ＳＦ3328が存在するところからおそらく当初から存在しなかったと推定される。この溝は東端で土塀基礎ＳＡ979を暗渠ＳＺ1090となってくぐる。また、北の土塀基礎ＳＡ3310に対しても暗渠ＳＺ3374となって隣屋敷に抜けている。

ＳＫ4141　直径0.7ｍ、深さ0.3ｍの土壙で、中は焼土が詰まっていた。

Ⅱ遺構面　この面も基本的に東半分は砂利敷きとなっていた。この遺構面に伴う遺構は、門近くの南北方向の柵列ＳＡ4127、それとほぼ直角に交わる柵列ＳＡ4122の他、1.6ｍ×1.0ｍの石敷遺構ＳＸ4144、井戸ＳＡ4131近くの通路ＳＳ4180などがあるに過ぎない。なお、この下層にⅢ遺構面があるが、Ⅱ遺構面までが町割り以後の遺構面である。

町割り以前の遺構面　発掘区南半の中央部を掘り下げたところ、土塀基礎ＳＡ4127の基底部より下層で遺構面の存在を確認した。明確な遺構は検出できなかったが、小礫群ＳＸ4168などがそれに伴う遺構である。この遺構面からこれまで一乗谷で出土した土師質皿とは異なり、より古いタイプの土師質皿が出土した。

（岩田　隆）



第３図　第77次調査遺構図(1)

遺　　物（PL.4～7）

本調査区における出土遺物の総点数は6,315点である。調査面積1,040㎡の、1㎡あたりの密度は6.07点／㎡となる。この数値は、1区画あたりにおける量数としては、武家屋敷と見られている第20次調査地(「出雲谷」)での、5.50／㎡に次いで低い数値である（福井県立朝倉氏遺跡資料館編1990『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査報告Ⅲ』福井県教育委員会)。その原因については、今後様々な点から究明していかねばならないが、さしあたり考えられる理由のひとつに、水田として開かれた後の削平・攪乱、ないしは他所への客土のため土ごと移動した結果によるということが挙げられる。これは遺構の検出状況とも関連しており、調査区西半部の、後世盛り土が行われた水田区画での、石敷遺構の伴う礎石建物ＳＢ4129を中心とする範囲を除いては、画的にまとまった遺構の検出もなく、又遺物もまとまった量では出土していないことと対応している。そして、遺物の大半は、後世に盛り土された水田区画（Ｅ～Ｋ列、２９～３７ライン）の盛土を取り払った段階でのものであった。

その器種構成は、第２表に示したとおりである。内訳は越前焼1,635点で全体の25%を示している。ついで、瀬戸・美濃焼の69点、土師質土器は3,803点と全体の60%に達している。以下、瓦質土器24点、

器種						%
日本製陶器	越前焼	甕			1,192	
		壺			52	
		鉢			51	
		擂鉢			328	
		火桶			8	
		陶皿			3	
		その他			1	
		計			1,635	25.9
	瀬戸美濃	碗			34	
		皿			1	
		茶入			4	
		鉢			2	
		徳利			1	
		杯			2	
		壺			6	
		計			59	0.8
		碗			19	
		皿			20	
		茶入			4	
		香炉			1	
		徳利			21	
		香炉			1	
		壺			3	
		計			69	1.1
	土師質土器	皿			3,758	
		土釜			30	
		土鈴			1	
		芯押			3	
		壺			5	
		鍋			3	
		土鍋			3	
		計			3,803	60.2
	瓦質土器	火鉢			18	
		瓦燈			3	
		風炉			1	
		火炉			1	
		火舎			1	
		計			24	0.4
	須恵器	壺			1	
		皿			1	
		その他			1	
		計			3	0.05
国産陶器・その他					2	0.03
					5,586	88.5

器種						%
中国製陶磁器	青磁	碗			82	
		皿			35	
		鉢			6	
		盤			2	
		香炉			6	
		器台			1	
		杯			1	
		花弁皿			1	
		その他			1	
		計			135	2.1
	白磁	碗			13	
		皿			105	
		杯			17	
		盤			1	
		その他			2	
		計			138	2.2
	染付	碗			29	
		皿			52	
		杯			2	
		盤			2	
		片			1	
		その他			2	
		計			88	1.4
赤絵・その他					3	..05
計					364	5.8
朝鮮陶磁		碗			19	
		皿			1	
		鉢			1	
		徳利			1	
		計			22	1.3
陶磁器計					5,972	94.5

器種						%
金属	銅	銭			28	
		釘			57	
	銅製品				1	
	鉄金具				1	
	火鉢				1	
	銅鏡				1	
	銅鞠				1	
	刃子				1	
	鎹				3	
	その他				1	
	計				95	1.5
石製品	パンドコ				75	
	火鉢				5	
	円盤				1	
	火打石				1	
	温石				1	
	硯				5	
	砥石				8	
	盤				17	
	こね鉢				3	
	玉石				12	
	臼				2	
	粉砕				7	
	その他				9	
	計				146	2.3
木製品	炭				20	
	漆椀				1	
	漆片				5	
	板片				8	
	曲物				1	
	自然木				1	
	櫛				1	
	計				37	0.6
近世	陶磁器類				47	
	その他				4	
	計				51	0.8
その他	塑土				8	
	骨				3	
	種子				1	
	伊万里				1	
	使い残し塗				1	
	計				14	0.2
合計					6,315	100.00

表１　第77次遺物一覧表

中国製陶磁器・青磁135点、白磁138点、染付88点、朝鮮製陶器22点となり、土器、陶磁器の合計は94.5%に達する。これらの遺物のうち、集中的に出土した「後世盛土」、「下層砂利混り褐色土」他、「深掘りトレンチ」の各土層から出土したものについて、その概要を述べてみたい。

後世盛土（PL.4）

2は越前焼大甕破片である。口唇部厚は2.5cmを計り、頸部は緩やかに屈曲して、肩部にいたる。小野分類（小野・金元1981『豊原寺跡II　華蔵院跡第2次発掘調査概報』丸岡町教育委員会）にいうIII群bに属する。以下分類の基準はいずれも断わらない限り、小野分類をさす。4、5も同様の分類に属するものである。3もいわゆる大甕にあたる。焼成不良により色調は赤褐色を呈してトロトロしている。1、6も中甕である。12は口唇部が肥厚して、断面逆三角形を呈するタイプの壺破片である。16は肩部に凸帯を有する壺破片である。15は四耳壺の肩部破片。25、26、27、28はいずれも鉢破片である。そのうち23は口縁部が内湾するタイプである。17～21は擂鉢破片である。III群～IV群に属する。46は青磁香炉である。復元径7.6cm、高5.4cmを計る。底部は形骸化した獣足が添付される。高台はベタ高台である。胎土、釉調とも良好である。34は線描蓮弁文の碗破片。32は内湾する小皿である。35はケズリ出しの鎬蓮弁文を有する鉢または碗の破片である。38～40は染付、41～45は白磁である。

下層砂利混り暗褐色土（PL.5）

ここで言う下層はいろいろな土層があり、必ずしも砂利混り暗褐色土だけではないが、全体に砂利を含んだ土層が見られたところから、とりあえず一括しておいた。土塁SA3310に接して検出された井戸や石積施設、あるいは石敷を伴うSB4129、門SI1083などの遺構群を最終段階の時期とし、これらの下位に位置するものを下層とした。詳細な時期の細分はここでは行わない。

53はIV群の大甕である。釉調はかせており、ザラザラした灰色を呈する。破片資料で個体としてはまとまらなかった。割れ目には修理痕があり、麻布に漆を含ませて貼付したものと見られる。同様な例は60の甕破片にも見られる。59は長辺13.6cm、短辺7.3cmを計る大甕破片である。割れ目断面に研磨ないしは摩耗痕が見られる。これは「円盤状陶製品」として、既に概報等に紹介されている資料と同じように、破片に2次加工が加えられ、使用された遺物である。用途としては「皮なめし」、あるいは「砥石」としての利用などが考えられる。54・55は同一個体の大甕の破片である。胎土は緻密で、青みがかった暗灰色

を呈する。口縁部の形態から、Ⅲａ群に属するものと見られる。

61～65は小壺で、61・64はいわゆる「おはぐろ壺」であろう。64は器壁内面に酸化鉄の付着が見られる。68～75は鉢、擂鉢の破片である。口縁部の形状からみて時期差があり、特に68・69・72は古手のグループに属するもので、小野分類に言うⅡ群の新しい段階、もしくはⅢ群の古い時期に位置するものと見られる。76・77は土師質土釜、79・80は瓦質火鉢である。前者には連続菱文、後者には連続唐草のスタンプ文がみられる。
81～85は瀬戸・美濃製品の鉄釉碗、壺、鉢である。86～92は同じく瀬戸・美濃製品の灰釉皿、鉢、碗である。

93～101は中国製陶磁器の青磁碗、皿、鉢である。96は小片でわかりにくいが雷文帯の蓮弁文碗と見られるものである。99･100はいずれも皿の底部であるが、高台裏に墨書、及び漆書の文字痕跡が見られる。かすれており文字は判読できない。102～109は白磁の皿である。このうち106・107は角杯、104・105・108・109は、いわゆる割高台の皿である。古手のグループに属する。108だけが底部露胎とならず、ズブがけである。117は赤絵の小杯である。底部の形状から「ツバ」形の皿と考えられる。119～121は灰釉の碗、皿、鉢である。117・118は鉄釉碗である。126～130は青磁碗、皿、盤である。123は灯明皿の灯芯押えである。122は土師質土釜、132～133は染付碗、皿である。134･135はバンドコの蓋及び身部である。

深掘りトレンチ（PL.7）

ここでは特にＩ列、32ラインのセクション用畔に沿って設定した、深掘りトレンチの出土遺物を呈示する。後世盛土を除去したのち、遺構が見られない部分を更に掘り下げたもので、薄い炭層が１～２枚確認された。地山は砂利・礫層であった。

下層及び深掘りトレンチで得られた土師質土器（ＰＬ．７　136～144）は、そのほとんどが酒杯、灯明皿などのカワラケ類であった。これの形態分類については、既に一乗谷のこれまでの調査報告の中で再三取り上げられ、説明が加えられているとおりであって、基本的にはその分類は現在も有効である。既ち、Ａ類、Ｂ類C_1類、C_2類、D_1類、D_2類、Ｅ類、Ｆ類の８分類である（朝倉氏遺跡調査研究所編1979『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ｉ』他）。詳しく図示する余裕はないが、今回出土した土師質皿は、その大半がこれらの分類のＣ・Ｄ類に含められるものの、若干数の土師質皿（ＰＬ．136～144）については、皿形態、口径差、ナデ調整などの観察結果からみて、Ｃ・Ｄ類とは違ってきており、従来の分類基準を若干手直しする性要が生じてきた。又、明らかに８分類の概念から外れる、特徴的な皿形態のものが出土していることも指摘しなければならない。これ

を仮に形容するなら「ボテ」タイプの皿とでもしておこう。既ち永平寺町「興行寺遺跡」の第２面炭化層でまとまって出土しており、形態的な特徴から、器壁に厚みがあり、見込みが深めで「ボッテリした」タイプの皿として、便宜上呼称しているものである。これと同じタイプの皿が第24次調査区ＳＥ849からも大･小のセットで出土している。（南洋一郎富山正明1992「越前・若狭における様相」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会)。これを従来のＢ類、既ち、口縁部ナデ調整を行わない、手ずくね成型のみのグループに含めて捉えるかどうか、検討の余地が生じてきたことなどが挙げられよう。

こうした土師質皿に関連して、前述の「興行　遺跡」や、南条町「杣山城伝飽和宮跡(小野・吉岡1978『史跡杣山城跡Ⅱ　伝飽和宮跡・外濠確認発掘調査報告』南条町教育委員会)」、或は丸岡町「豊原寺華蔵院跡（文献は前掲）」出土の各土師質皿を検討した結果、それぞれの遺跡の、土師質皿の特徴に共通するものがいくつか指摘され、本遺跡下層出土の土師質皿には、最盛期段階の土師質皿とは異なるものが混じっていることが判明したのである。時期的にも、15世紀半ばから、前半以前に生産された土師質皿である可能性が出てきた。前述した一乗谷の、これまでの土師質皿の基本分類を再検討し、明確な位置づけを行う必要があることは論をまたないところであるが、いわゆる最盛期段階の、８分類された土師質皿のセット内容を含めた、成型技法の成立に至る経過を辿る上で、今回採集した土師質皿は重要な内容を含んでいると言える。

この点については、これまでにも各調査区において下層検出を試み、下層出土遺物を検討してきた経過がある。その検討結果と照合させる必要も他方では生じている。そうした作業を経た後には、一乗谷出土の土師質皿全体の時期別による分類への将来的見込みも可能となり、ひいては土師質土器の、編年への足がかりにもなっていくものと思われる。

（南洋一郎）

Ⅲ　第78次調査

本調査は、福井市城戸ノ内町字川合殿地係、約1,270㎡を対象としたものである。一乗谷川の西岸、朝倉館の西、やや南寄のこの地区一帯には、山裾に沿って比較的規模の大きな屋敷が整然と配されていたことが知られて来ている。今回の調査区は、これまでの調査により判明している南北方向道路に面して西側、山裾との間に位置するもので、旧水田の形状やすでに検出されている門、土塁等から、南北約30m、東西約42mの範囲に設定した。北に隣接する第77次調査の終了を待って、平成4年8月10日に調査を開始し、約3ケ月を要して遺構の検出を終えた。同年11月12日に先行した第77次調査と合せて写真測量を実施し、遺構図を作成した。遺物整理を含めた検討作業は現在も進行中である。以下、述べるのはその概略の速報である。

遺　構（PL.8～10）

調査地は水田化されており、ほぼ中央に水路が存在し、大きく南北に2分され、南半はさらに3分、北半は2分されていた。また、北西部の一角は、第77次調査区と伴に約0.5m盛土された高い水田となっていた。耕土を除去すると、この高く盛土された水田は当初のものでなく、一旦、水田化後、再び盛土されたものであることも判明し、同様に、南半部の東半も盛土されていることが判明した。この盛土内には、多量の石が混入されており、遺構の削平等により生じたものであることが考えられた。調査の結果をみてみると大半の遺構が削平されており、保存状況は良好とはいえない。

検出した主な遺構は、土塁2、溝6、門1、礎石建物5、井戸1、石積施設2、大甕埋設遺構1等である。これらの遺構は検出面から大きくは前後2時期に区分されるようである。しかし、これは、あくまでも現時点の大別であって今後整理検討が進めば修正されることも予想される。

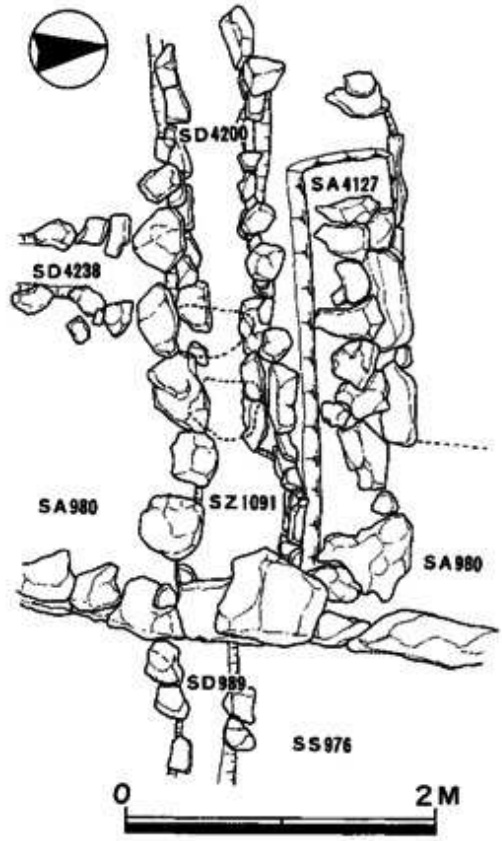
以下、主要な遺構について概説する。なお、説明に用いる方位は屋敷の正面となる道路側が東、山裾側が西とする。また、全体地形としては谷の中央を一乗谷川が北へ向って流れており、したがって西南が水上となる。

ＳＡ980・981　屋敷の東を画する南北方向土塁である。ほぼ中央に門ＳＩ1084が設けられており、これを境にして南をＳＡ981、北をＳＡ980とする。先の第29次調査において道路ＳＳ976に面する石垣等が検出されている。また、この土塁については、現在進めている町並立体復原事業実施との関係から、昨年度に先行調査を行った。ＳＡ981は幅1.8m（6尺）と推定される。暗渠ＳＺ1092が設けられている。直接道路に面するわけではないが、内側

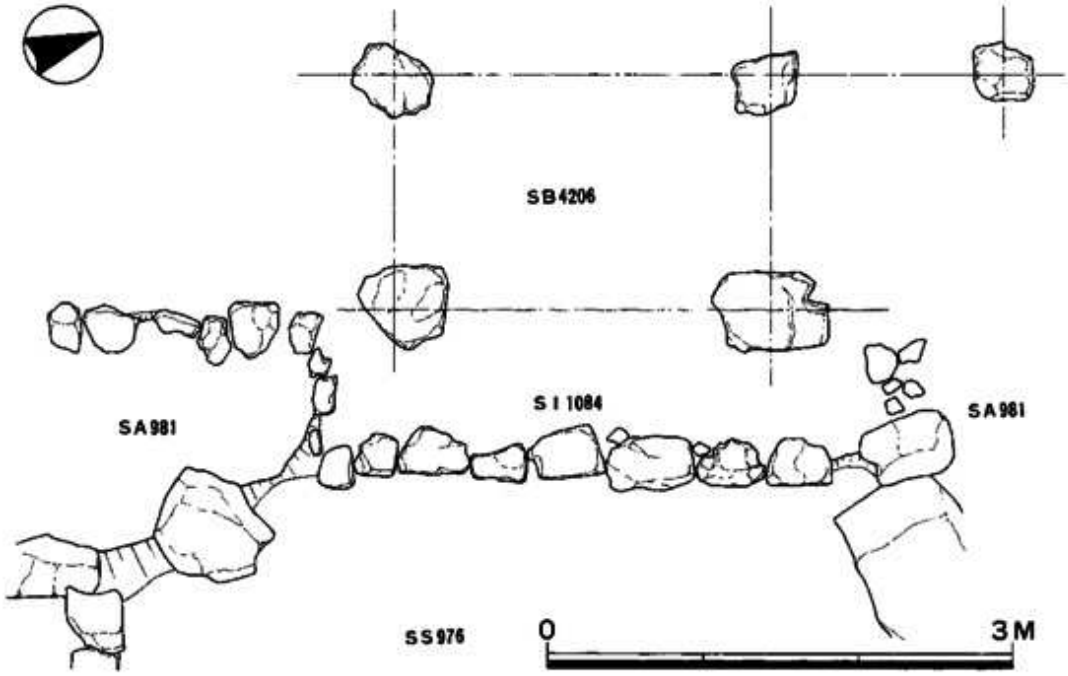
に比べ外側（東面）の石が大きい。内側の石の残存状況はあまり良くない。ＳＡ980は内側の線はあまり明確ではなく、幅等不明な点もある。しかし、屋敷の東北隅部となる東西方向土塁ＳＡ4127との接点に設けられた暗渠ＳＺ1091の天井石や南北の溝状遺構ＳＤ4238等から考え、2.1ｍ（７尺）程度の幅と推定される。

ＳＡ4127　屋敷の北を画する東西方向土塁。幅は1.2ｍ（４尺）である。東端から約15ｍ西で若干北へ折れている。また西の山裾近くではほとんど側石はみられない。削平と考えられるが不明な点もある。

ＳＺ1091　土塁ＳＡ980を潜る暗渠。溝ＳＤ4200を流れる屋敷内の水を外へ排出する。暗渠内の北側石は二重になっており、改修があったと考えられる。天井石も一部現存していた。底石は見られなかった。



第４図　第78次調査遺構(1)



第５図　第78次調査遺構(2)

ＳＩ1084・ＳＢ4206　屋敷の門とその建物。門の間口は約３ｍ（10尺）。土塁同様、第29次調査により道路に面する東面は検出されており、修覆整備されている。門の両脇石は大振りの石を用いるのが通常で、この門の場合は、向って右手が正面幅0.7ｍ、奥行幅0.8ｍ、高さ1.2ｍ、左手は、同様に0.6ｍ、0.8ｍ、0.7ｍとなっている。土塁外面から0.3ｍ程内へ入った所に偏平な径0.4～0.5ｍ程の自然石を基壇状に並べている。跋上高は0.2ｍ程である。そして門建物ＳＢ4206はこの約１ｍ内に配されている。基本となる礎石は４個で、前面（東）の２個が少し大きい。その配置から、正面幅2.4ｍ（８尺）、奥行1.5ｍ（５尺）の規模の薬医門形式の建物が推定される。なお、控柱筋にあって、約1.5ｍ北にも礎石と考えられる石がみられる。門との関係も考えられるが、詳細は不明である。

ＳＢ4207～4210　屋敷南西部の礎石建物群。礎石の残存状況にバラつきがあってその規模形状等は明確でない。全体に、ほぼ１間を約1.9ｍ（6.2尺）を基準とする計画が認められる。礎石も径0.3～0.5ｍ程で比較的大きい。礎石レベルをみてみると、これらの建物群の中でも南半にみられる少し密に礎石を並べた一群は他に比べ0.1ｍ程低く据えられており、これをＳＢ4209として区別して考える。若干、先行するものと考えられる。なお、この礎石に側って、礫石を溝状に配した遺構が見られた。

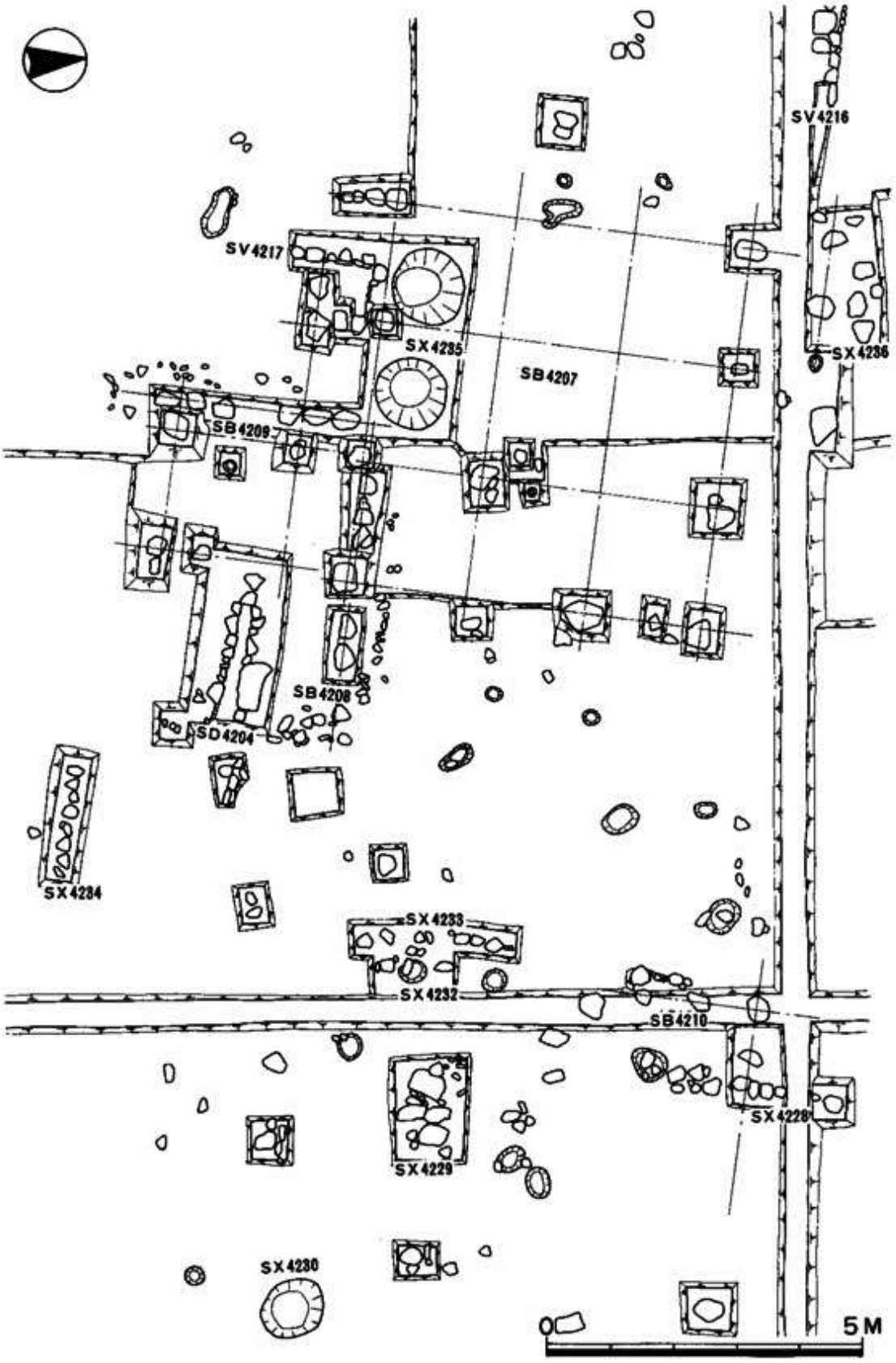
ＳＤ4200～4202　北土塁協を東西に流れる溝ＳＤ4200とこれに注ぐＬ字形の溝ＳＤ4201・4202。ＳＤ4200は幅0.3ｍ、深0.3ｍ。前述した暗渠ＳＺ1091を通して屋敷外へ排水する。これに対し、ＳＤ4201・4202は幅0.25ｍ、深0.15～0.2ｍと浅く、側石は一石である。残存状況もあまり良好とはいえず、特に、この２つの溝の取り付き部は明確ではない。

ＳＥ4211　唯一の井戸。自然石積で内径0.9ｍ程、深さは約2.5ｍ。砂礫層から直接積み上げたようであり、底部は若干不整形である。天端石を欠く。

以上、主な遺構について概説した。最後に全体を概観し、まとめに代える。

前述したように遺構は大きく前後２時期に区分されると思われる。整理すると、まず、掘り下げ部で検出されている遺構面とその遺構群ＳＸ4224～4227等が先行し、この0.3～0.4ｍ程上部に位置する建物ＳＢ4207や井戸ＳＥ4211に代表される後期の遺構群が存在する。この後期の遺構群には山裾部のＳＶ4216、ＳＤ4205や、溝ＳＤ4201・4202、石積遺構ＳＦ4212・4213等も含まれる。なお、この２つの時期においても若干前後関係が伺われるものもあり、これらの検討によっては、さらに区分される可能性は残されている。また、北西部に位置するＳＤ4203、ＳＶ4215は水田化に伴う遺構の可能性が強い。前期遺構面と正面の門ＳＩ1084の関係はほぼ水平で、また、後期遺構群に伴う盛土整形厚は東へ向って減少しており、また東部では下層遺構が認められないので、門・土塁等は前後期を通して存在したと考えられる。

（吉岡泰英）



第6図　第78次調査遺構(3)

遺　　物（PL.10~20）

本調査区で出土した遺物の総破片数は、7,842点を数える。調査面積は1,270㎡であり、単位面積当りの出土数は約6.2点/㎡となる。一乗谷の調査例の中では少ない部類に入る。内訳は、表2に示したとおりである。概観すると土師質土器、越前焼が多く、次いで中国製陶磁器、瀬戸・美濃焼、瓦質・その他の国産陶器類が続くという、一乗谷における一般的な出土傾向を示しているが、なかでは土師質土器が一般的な値（約60%）と比べて少ないようである。

越前焼　甕はⅣ群が主体で、（1・2）は、調査区南西部で検出した埋設遺構ＳＸ4235の大甕口縁部である。2基のうち（1）は西、（2）は東の1基である。

（3）は、片口をもつ小振りの壺である。肩部にへら記号をもつ。（4）は、低い高台をもつ底部の広い壺である。大きく張りのある胴から内傾気味に立ち上がる頸部は、「く」字状に大きく外反し、口縁は更に外反する。外面の肩部から頸部にかけて、串状の工具による施文が巡る。器形、施文とも一乗谷における類例は少ない。

鉢は、いわゆる擂鉢形で口縁内側にへら記号をもつ（5）や、小振りの（6）、口縁の内湾する（7）などが出土した。

擂鉢も甕同様にⅣ群が主体で、ＳＸ4230の北で遺構に据えられた形で出土した（10）や、（11）などⅢ群も若干混在する。また、屋敷中央の深掘りトレンチから口縁に沈線をもつⅠ群の（8）が出土し、ＳＤ4202北側の整地層からは、口縁の沈線が凹線化した、Ⅱ群か

器種				破片数	%
日本製陶器・土器	越前焼	甕		1,798	
		壺		250	
		鉢		187	
		擂鉢		559	
		火鉢		21	
		その他		1	
		計		2,816	35.9
	瀬戸・美濃焼	鉄釉	碗	59	
			皿	1	
			鉢	5	
			灯明皿	2	
			壺	12	
			瓶	12	
			その他	3	
		灰釉	碗	27	
			皿	9	
			鉢	9	
			瓶	3	
			その他	1	
		計		94	1.2
	土師質	皿		3,677	
		土釜		12	
		土鍋		4	
		その他		2	
		計		3,695	47.1
	瓦質	風炉		79	
		火鉢		13	
		香炉		3	
		仏花瓶		1	
		その他		4	
		計		100	1.3
	信楽・その他			25	0.3
	備前・その他			106	1.4
	小計			6,886	87.8

器種				破片数	%
中国製陶磁器	青磁	碗		113	
		皿		59	
		鉢		8	
		瓶		1	
		香炉		6	
		その他		6	
		計		193	2.5
	白磁	碗		11	
		皿		258	
		坏		12	
		その他		3	
		計		284	3.6
	染付	碗		59	
		皿		82	
		坏		3	
		計		144	1.8
小計				621	7.9
新製陶器	そば猪口			1	
	白磁碗			7	
	壺			3	
	計			11	0.1
陶磁器類の計				7,518	95.9

器種			破片数	%
金属	兜鍬・鋲立		1	
	鉄鍋		1	
	鉄釘		27	
	小柄		1	
	銅銭		9	
	仏具		1	
	鉄砲の玉		1	
	その他		32	
	計		73	0.9
石製品	茶臼		1	
	硯		3	
	パンドコ		61	
	風炉		2	
	砥石		12	
	臼		1	
	鉢		15	
	盤		51	
	その他		82	
	計		228	2.9
木製品	漆片		3	
	その他		1	
	計		4	0.1
その他	硬石		6	
	紙洋		1	
	炭		10	
	その他		2	
	計		19	0.2
合計			7,842	100

表2　第78次調査出土遺物一覧

らⅢ群への過渡期の所産と思える（９）なども出土した。

瀬戸・美濃焼　鉄釉・灰釉ともに碗が最も多い。灰釉は一般的に皿が多い傾向にあるが、ここでは極端に少ない。（12）は、体部が直線的に開く鉢である。口縁は内側に折り返され、内面に突帯をもつ。内外面とも口縁部から胴部上位にかけてさび釉がほどこされる。（13）は、削り出しの輪高台から体部が直線的に開く黄瀬戸の碗である。（14）は、口径約4.4cmと小振りの鍔釜である。表面の鉄釉は、二次的に火を受けかせている。

（15）は、口径（約14.5cm）に対して器高の低い、平碗風の灰釉碗である。胴部に比べて口縁部を薄くつくる。（16）は、口縁内側に段をもち、体部が直線的に開く鉢である。内外面とも、口縁から胴部半ばまで施釉される。（17）は、口径約13.4cmの卸皿である。口縁上面に浅い凹線を巡らせ、口縁部にのみ施釉される。（18）は、片口をもつ小壺である。肩部に耳を張り付ける。

瓦質土器　（19）は、肩部に３窓をもつ風炉である。焼きがあまく、全体に橙褐色を呈する器表は荒れている。垂直に立ち上がる頸部外面には、花文のスタンプが施される。また、腰部に凸帯を巡らせ、底部には３足を貼り付ける。

中国製陶磁器　青磁は、碗が約59％で最も多い。（20）は、口縁外面に雷文帯をもつ碗である。（21）は、片切彫の蓮弁をもつ碗で、見込みに蓮華の印花をもつ。（22）は、見込に印花をもつ碗片である。（23）は、口縁が端反の皿である。外面に、片切彫の蓮弁文、内面にへら状の施文具による蓮弁文をもつ。（24）は青白磁香炉の脚部で、獣の頭部を意匠化している。（25）は、青白磁碗の底部で、露胎の高台内に「九□」の朱書をもつ。

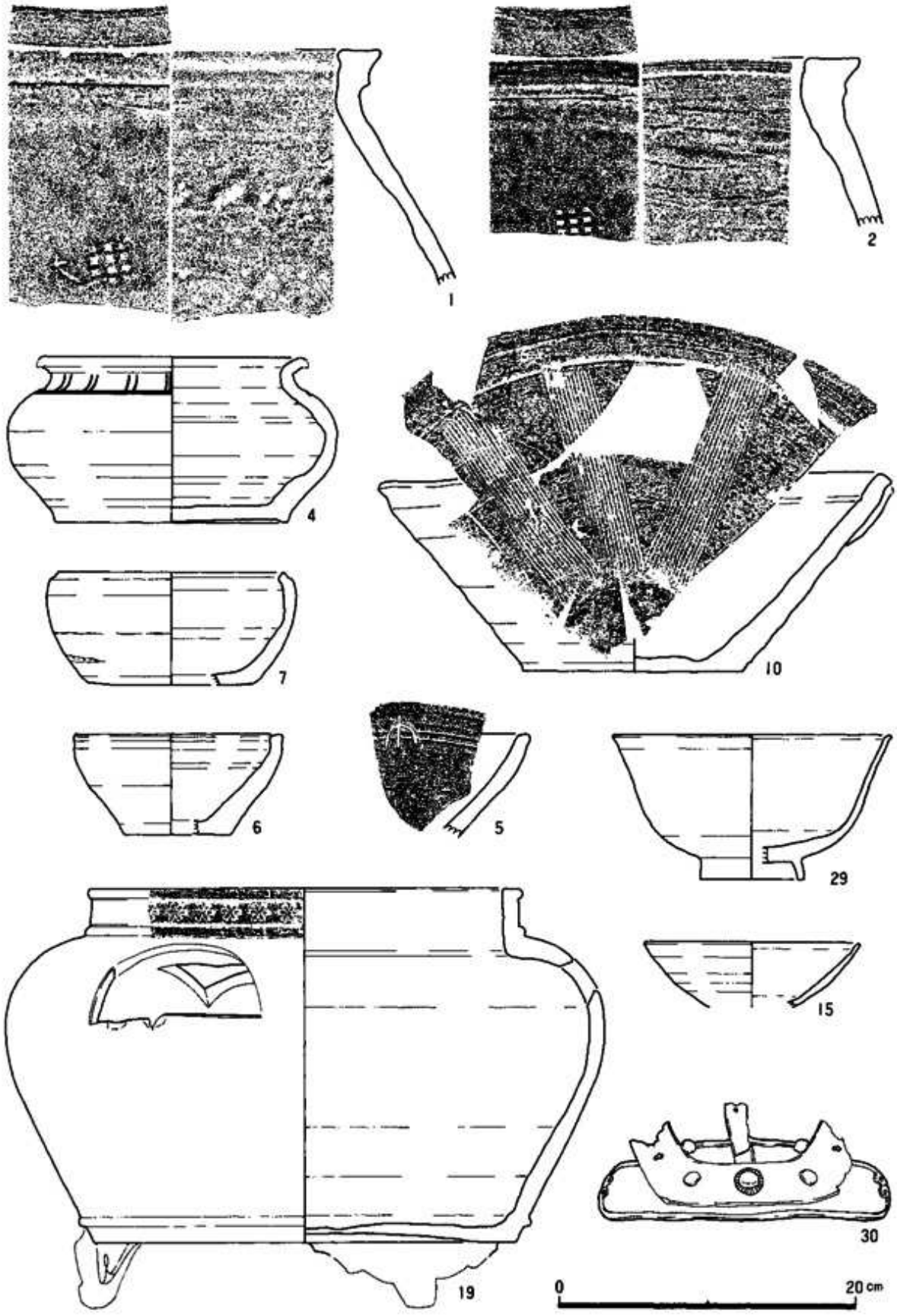
白磁は皿が約91％で最も多く、口縁が端反の皿が大半を占める。（26）は、白濁した釉の割高台の皿で、露胎の高台内に漆で書かれた「二」が見られる。（27）は、白濁した釉の割高台の八角坏で、露胎の高台内に朱で「●」印をつける。（28）は、腰部に張りをもつ坏で、重ね焼きのため見込の釉が輪状に拭き取られ、高台畳付も露胎としている。

朝鮮製陶磁器　（29）は白磁碗である。見込が広く、腰が張り、口縁はわずかに外反する。角張った高さ約1.3cmの高台は、やや外開きで、畳付に目痕がのこる。目痕は丁寧に磨かれている。使用時に一度割れており、漆を用いた補修痕が認められる。

金属　兜の眉庇と前立（鍬形台）である。眉庇は鉄製で、銅製の覆輪で縁を飾る。覆輪は左右両側と、中央下部をピン留めする。兜本体には、上部３本の割ピンで固定する。前立は、中央と左右の３本の割ピンで眉庇に固定する。中央のピンの座金に細線が施される以外は、特に表面の装飾的細工は認められない。

その他　（31）は壁土である。焼けて赤褐色を呈し、厚さは６cm前後である。ＳＥ4211からまとまって出土している。

（月輪　泰）



第5図　第78次調査遺物(1)

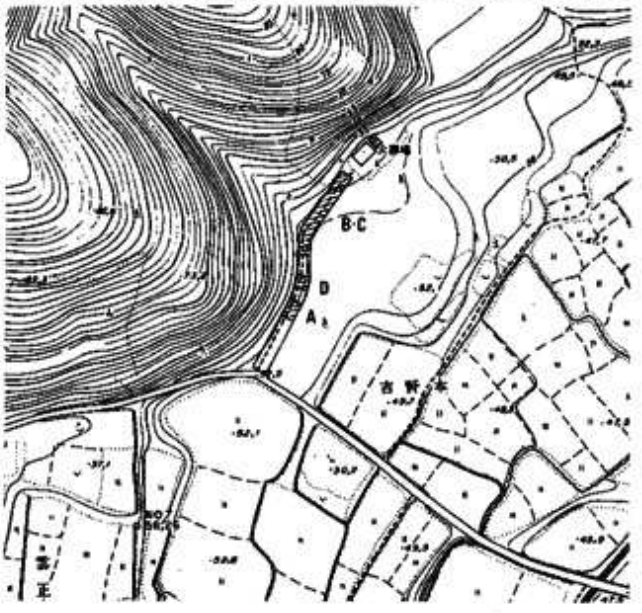
Ⅳ．第79次調査

（城戸ノ内町火葬場導入路拡副工事に伴う事前調査）

本調査は、城戸ノ内町火葬場導入路の拡副工事と「納灰所」の改修工事に伴う現状変更許可申請書が提出されたことによるもので、事前に調査を行い、遺構の性格如何によっては、その保存のために設計変更を求めることも有り得る、という条件のもとで実施されたものである。

調査地は城戸ノ内町字法満寺33－66で、八地谷の入口北側に位置する。平成４年５月６日より発掘調査を開始し、５月11日には遺構の検出作業を終了した。続行して全体の遺構写真撮影、実測を行い、全ての作業は15日に終了した。調査は第77次の調査と並行するかたちで実施された。そして先ず、工事対象地に対して幅３ｍ、長３～４ｍのトレンチＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄを一定の間隔に設定し、遺構が検出された場合は、逐求トレンチを拡張しながら、遺構の広がりを見ていくこととした（挿図４）。

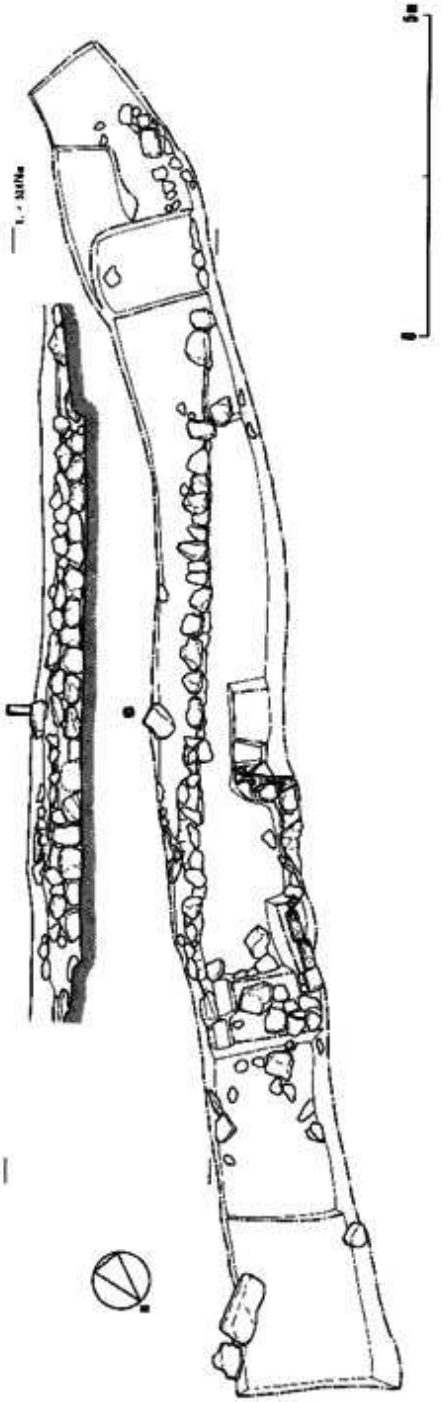
火葬場導入路の現状は、町内所有の道路で「八地谷」入口で市道と分岐し、幅２～３ｍの破利敷の道路が北へゆるく曲線を描いて60ｍほど進み、火葬場へ連結している。この道路は字「法満寺」と字「吉野本」との字境をなす場所でもある。火葬場の北は法満寺谷の入口であり、調査対象地西側はそれとは別の小さな谷が開いている。数段の平場が残っており、屋敷跡と推定される。対象地の東側は30ｍ四方の区画があり、通称「ホリドン」の地名がある。周囲は石垣が３方にのこり、東面は第52次調査で南北道路をもつ規模の大きな石垣であることが判明している。「一乗谷古絵図」には「堀江石見守アト」とある場所に相当する。これは坂井郡金津に根拠地を有した朝倉氏の重臣のひとり、「堀江石見守」の一乗谷に下付された屋敷跡と推定される。このように位置的にみて重要な遺構が検出されることは十分予想された。



第６図　第79次調査地トレンチ設定図

発掘の結果、Ｂ、Ｃトレンチで長14ｍにわたって西面する石垣が検出された（第７図）。この石垣は

通称「ホリドン」の区画の西側を区切る屋敷の境界土塁（？）もしくは段に伴う石垣と考えられる。道路拡副工事に伴う事前調査という制約もあり、遺構全体のプランは把握することができなかったが、この石垣より東側へ、つまり「ホリドン」の区画に向かって遺構が広がっていくことが確実となった。更に今回検出された石垣の基底部は画的な広がりを有して山側に延びており、小谷のいくつかの段（先に平場とした平坦地）に関連していることも判明した。今後、未買収地ではあるが山側裾部への遺構の広がり、という点にも留意が必要であることが指摘される。

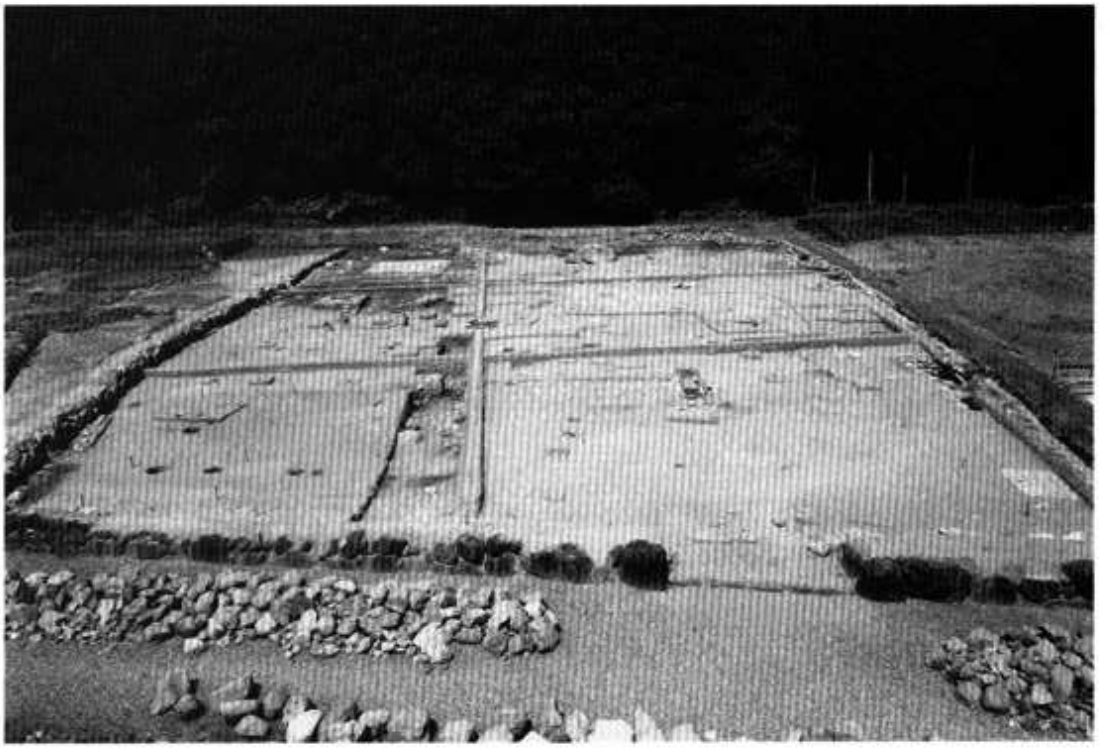


調査地における基本層序は、発掘された面までの深さが表土下0.85mを測り、上から現道路、旧道路、薄い「酸化鉄層」をはさんで黄色山土混じりガラ石層、黄色山土層、発掘面の順となる。前述の石垣列はこの黄色山土混じりガラ石層で検出されたもので、朝倉氏滅亡後、何らかの理由で一旦埋め立てられたものと判断された。その後、字境として「農道」が引かれ、あるいは火葬場への導入路として造成された面が「酸化鉄層」より上位の層であると考えられるものである。

朝倉氏時代に属する遺物は、概ね、この「酸化鉄層」と、この下位の層より出土した。その量はテン箱にして約5箱である。越前焼甕、壺、擂鉢、土師質土器、青磁・白磁・染付などの中国製陶磁器がある。更に石製バンドコ、火鉢なども見られ、出土遺物の組成は、通常の調査地での出土例と異なるところはない。

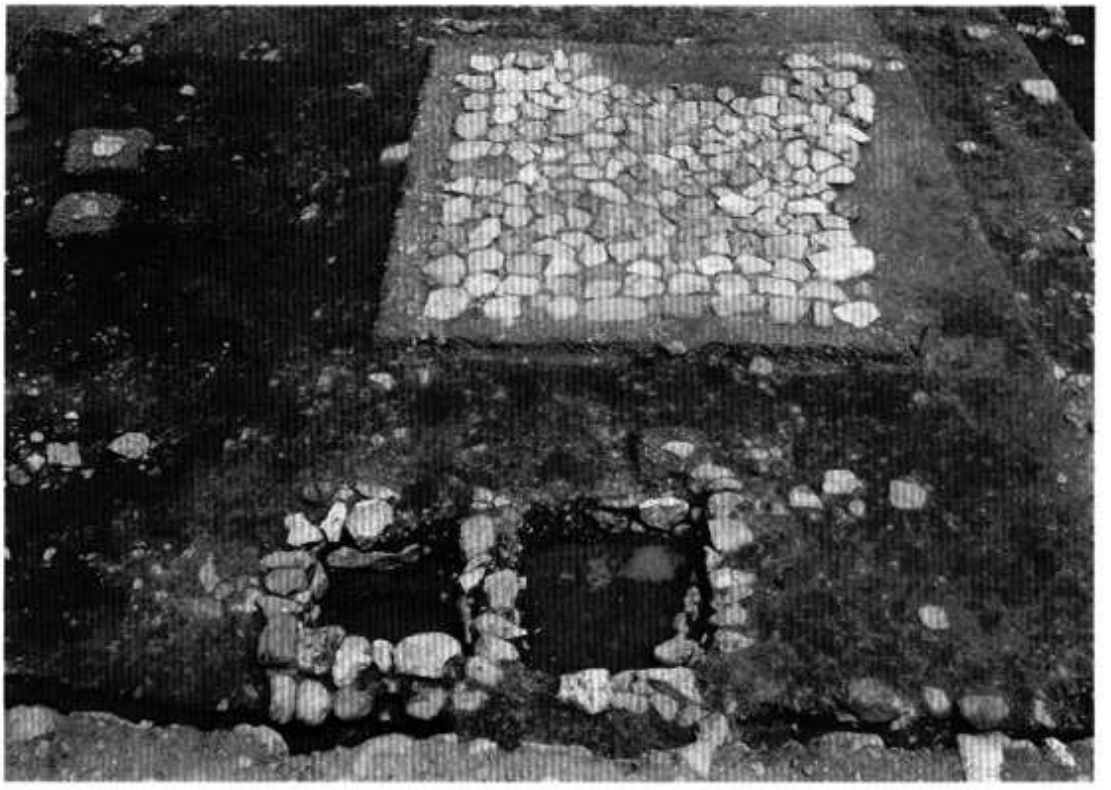
工事は、この遺構を保護するため盛り土し、路肩の護岸も現状より上へ石垣を積み上げるという工法をとるので、この点については問題はないものと判断された。（南洋一郎）

第7図　第79次調査全測図・石垣エレベーション

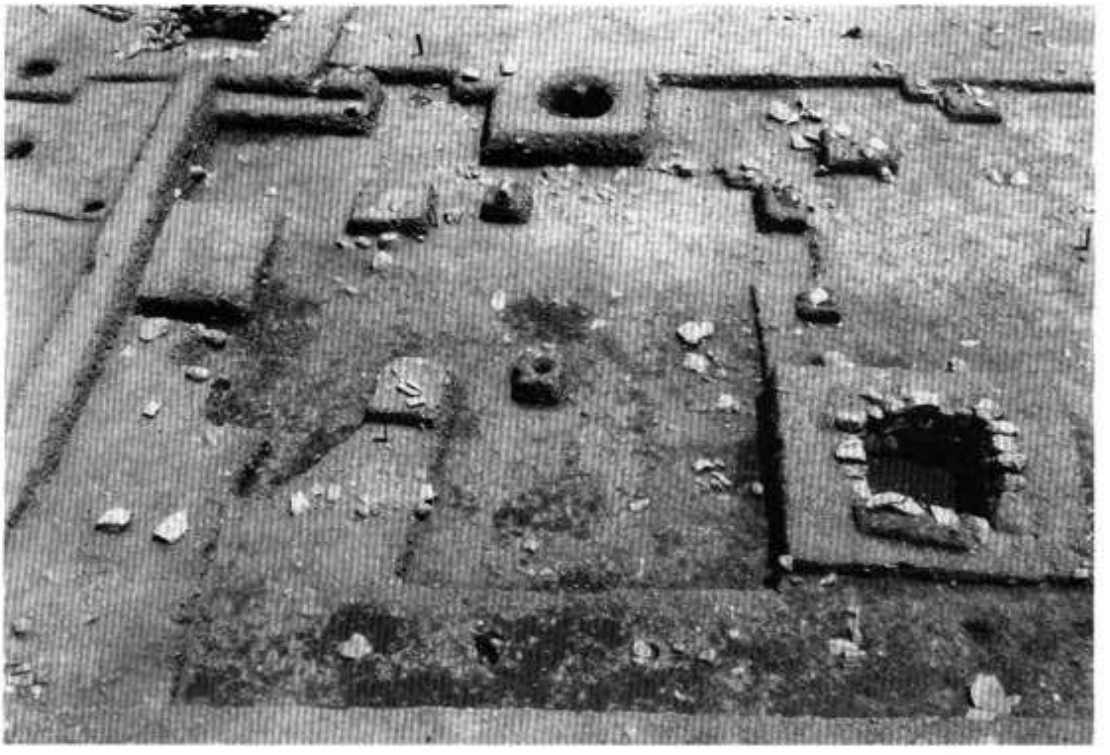


調査地区全景（東から）

調査地区北西部（南から）



SF4135・4136　SB4129（南から）



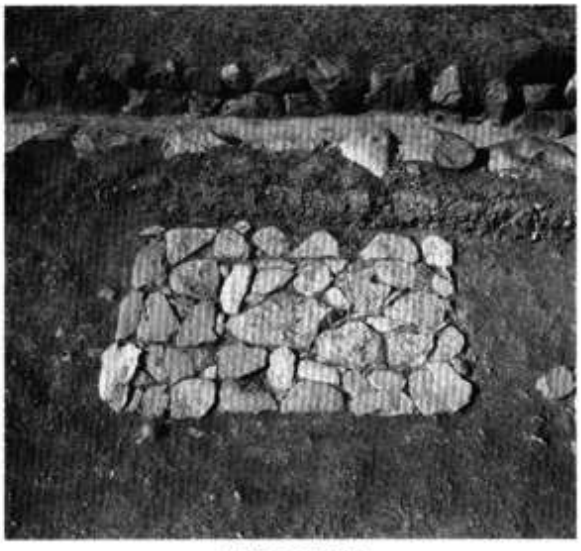
下層遺構面（西から）

石積遺構ＳＦ4132　ＳＸ4147

石積遺構ＳＦ3329

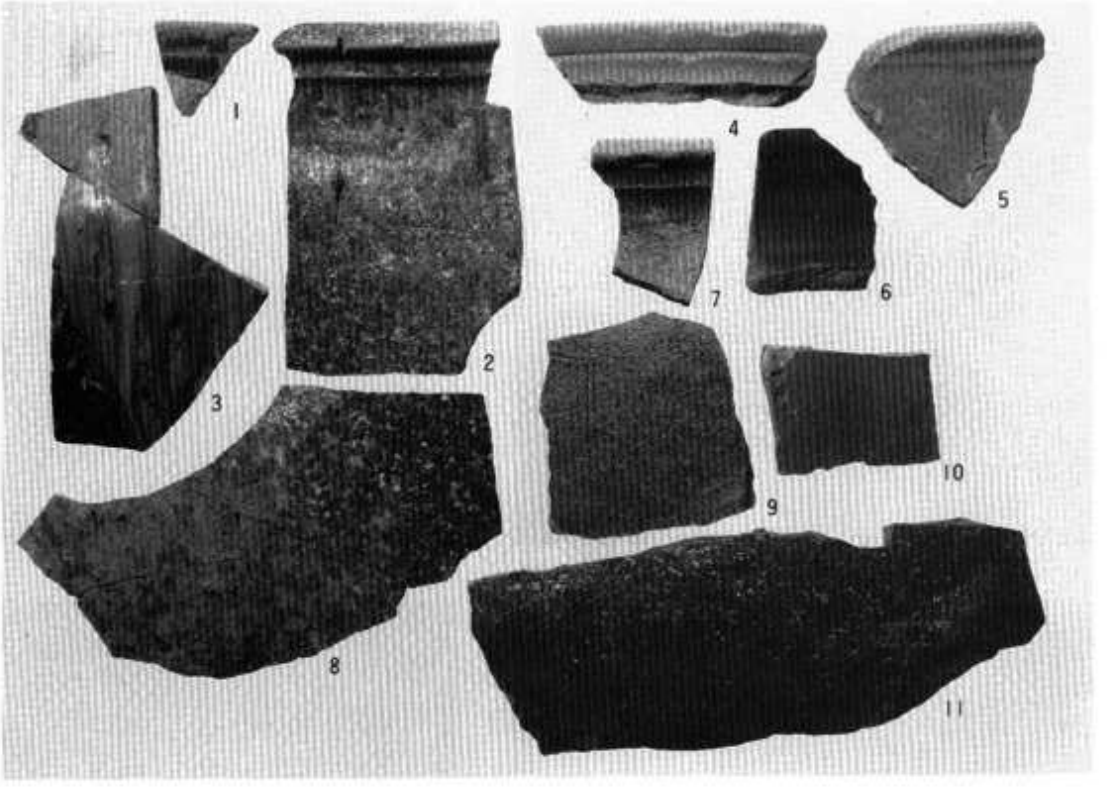
石積遺構ＳＦ4136・4135

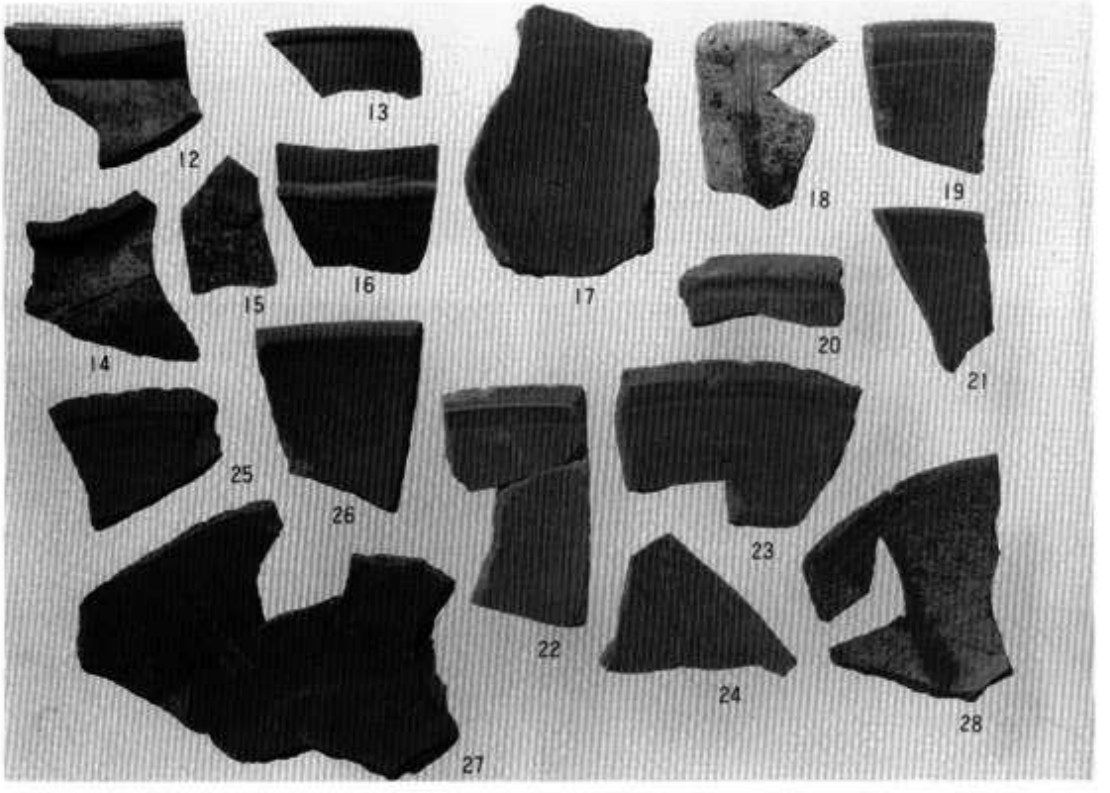
石積遺構ＳＦ4133



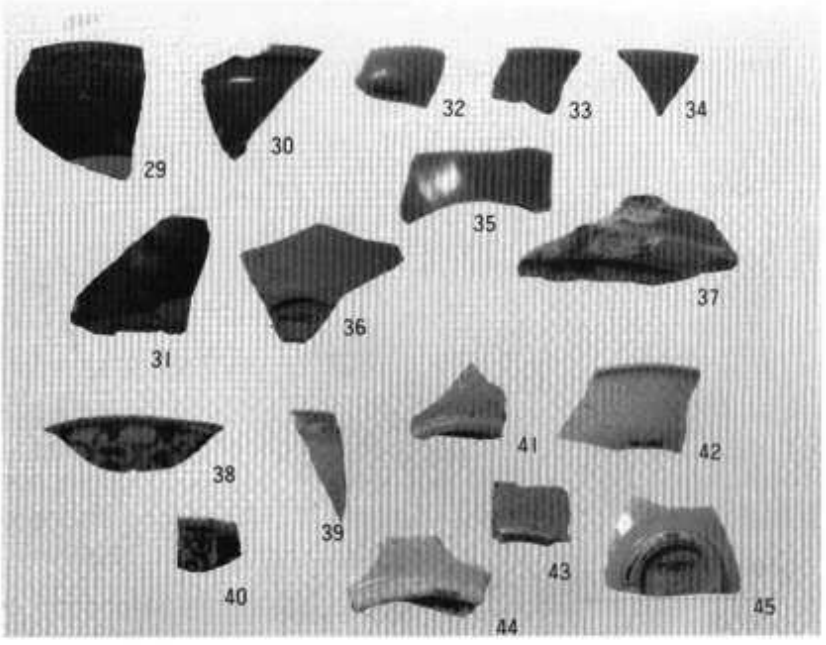
石敷ＳＸ4144

井戸ＳＥ4130





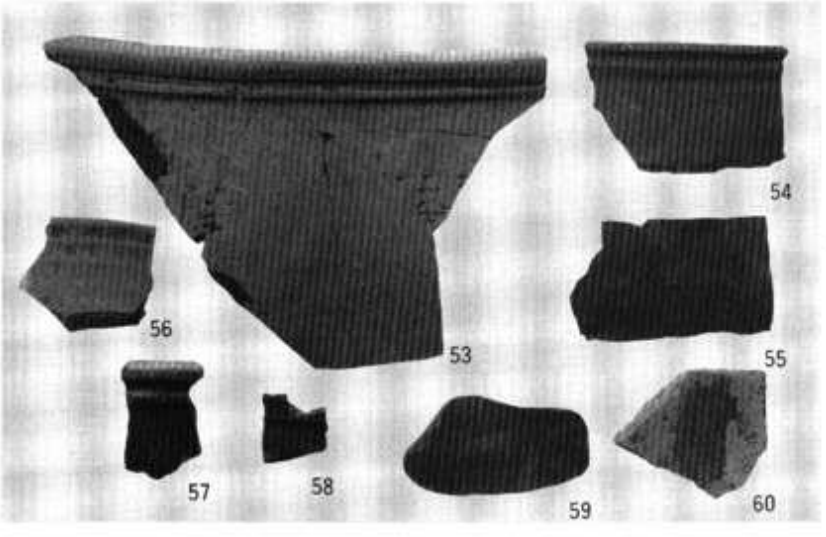
後世盛土　1～11越前焼甕　12～16越前焼壺　17～24越前焼擂鉢　25～28越前焼鉢



後世盛土

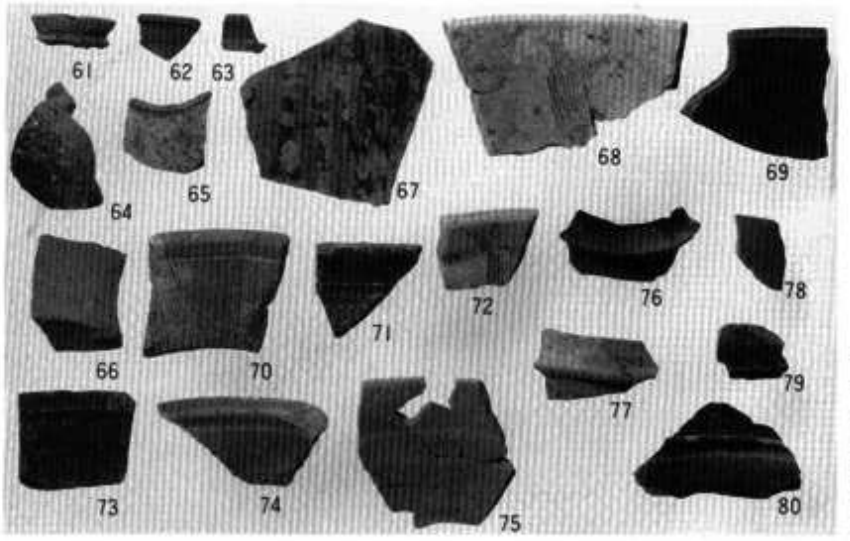
29～31　鉄釉
32～35　青磁碗
36
37　　青磁盤
38　　染付皿
39・40　染付碗
41～45　白磁皿

46　　青磁香炉



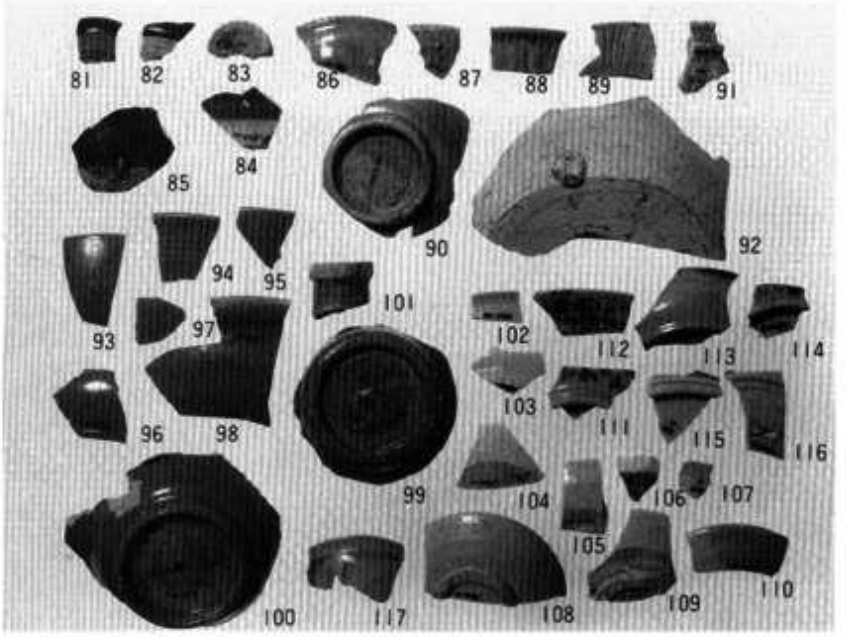
下層砂利混り暗褐色土

53～60　越前焼甕

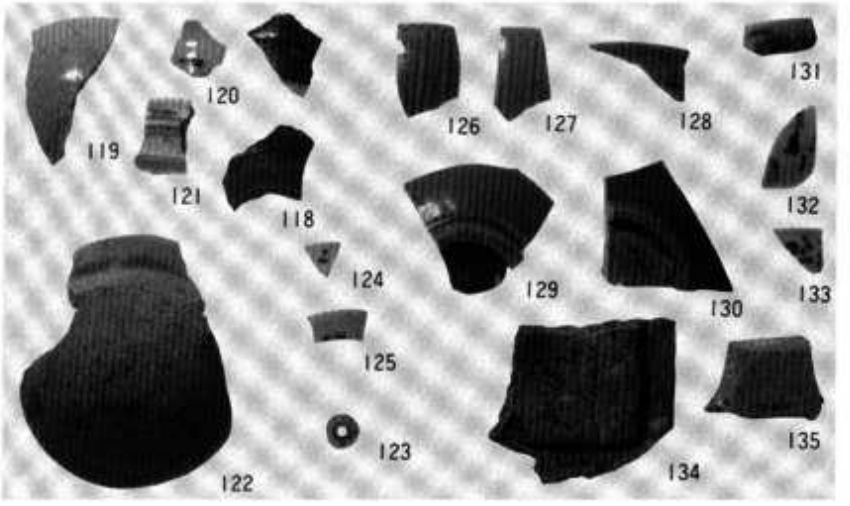


下層砂利混り暗褐色土

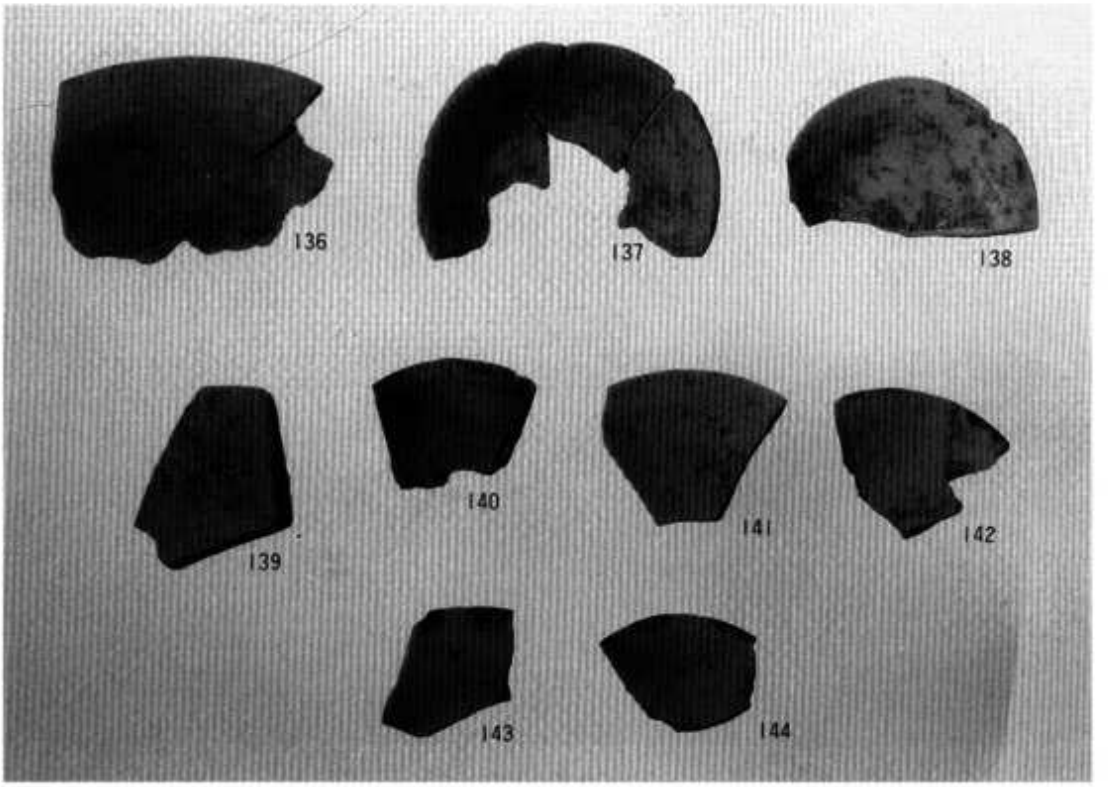
61～66	越前焼壺
67	越前焼甕
69～75	越前焼擂鉢
76・77	土師質羽釜
78～80	瓦質火鉢

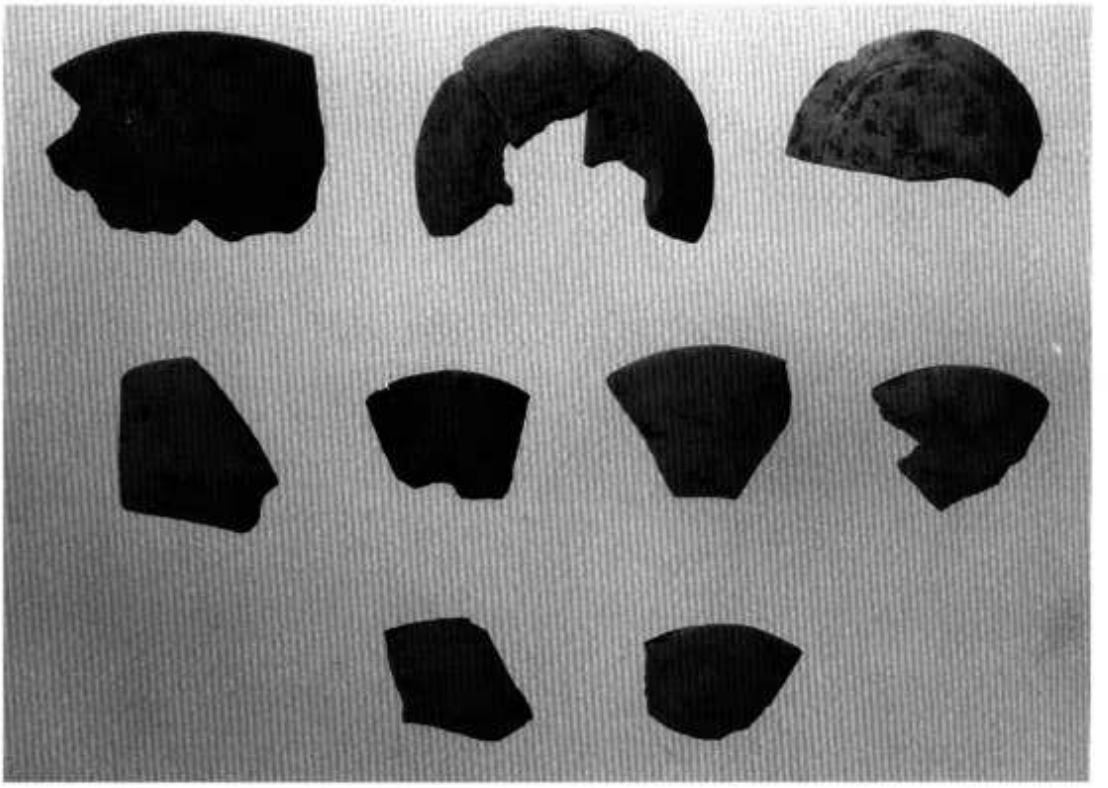


81～85	鉄釉碗
86～89	灰釉皿
90	灰釉碗
91・92	灰釉鉢
93～95	青磁碗
96～100	青磁皿
101～110	白磁皿
111	染付碗
112～116	染付皿



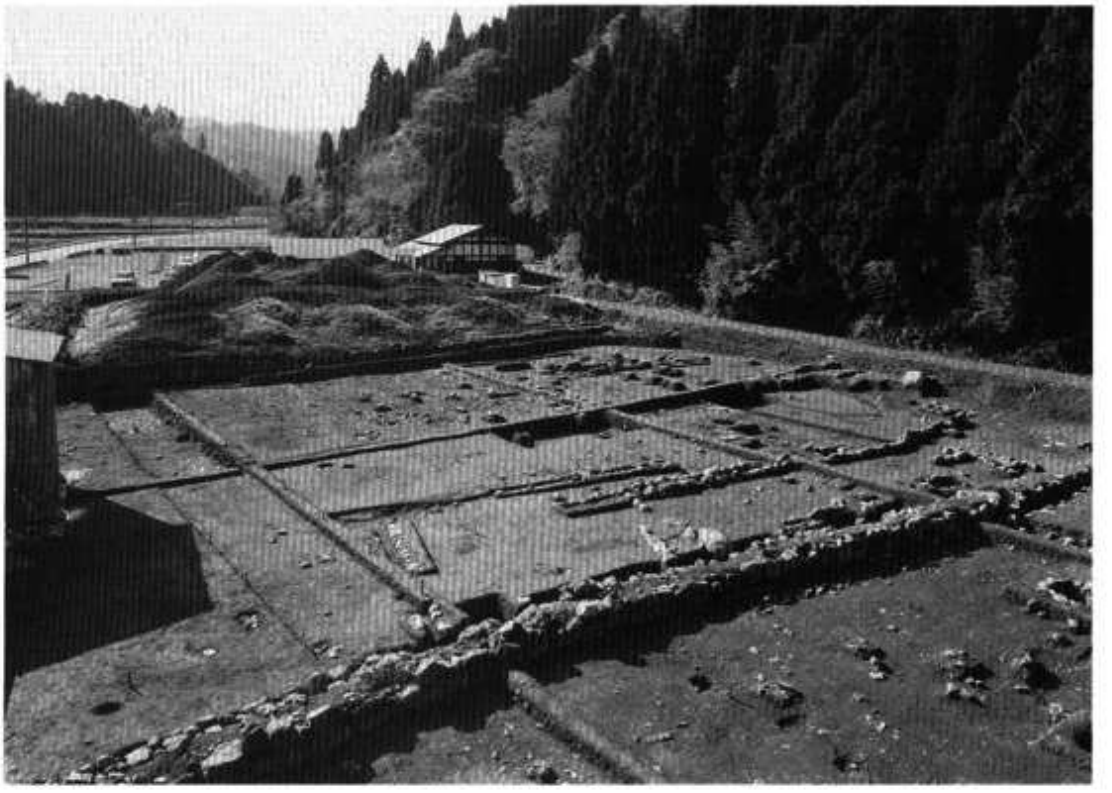
117・118	鉄釉碗
119	灰釉碗
120	灰釉皿
121	灰釉鉢
122	土師質羽釜
123	土師質芯押え
124・125	白磁皿
126～129	青磁碗
130	青磁盤
131～134	染付碗
134・135	パンドコ





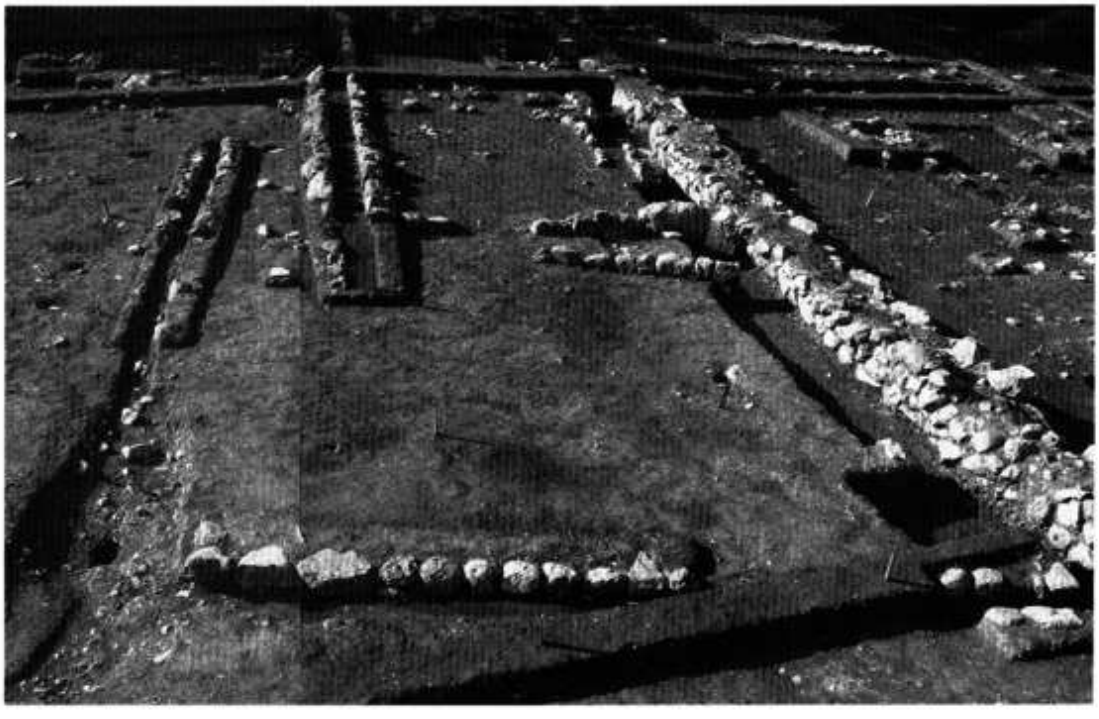
深掘トレンチ　136～144　土師質皿

調査区全景（南東から）



同　上（北東から）

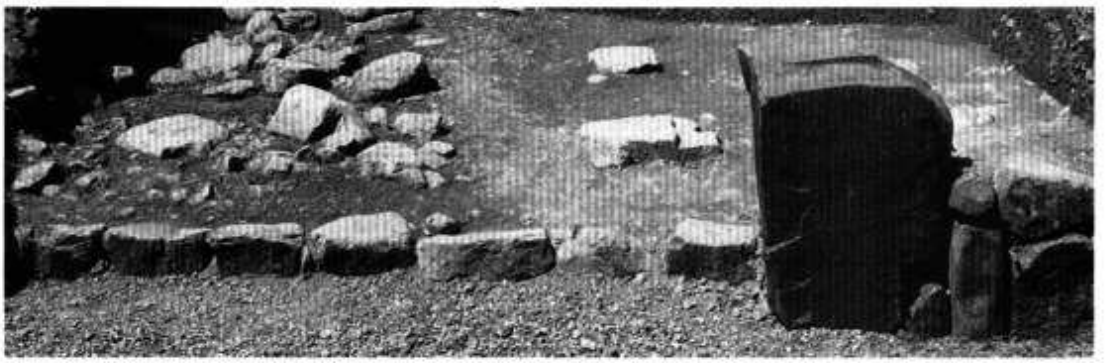
ＳＢ4207～4209外（西から）



ＳＤ4201・4202外（東から）

SA4127・SD4200（東から）

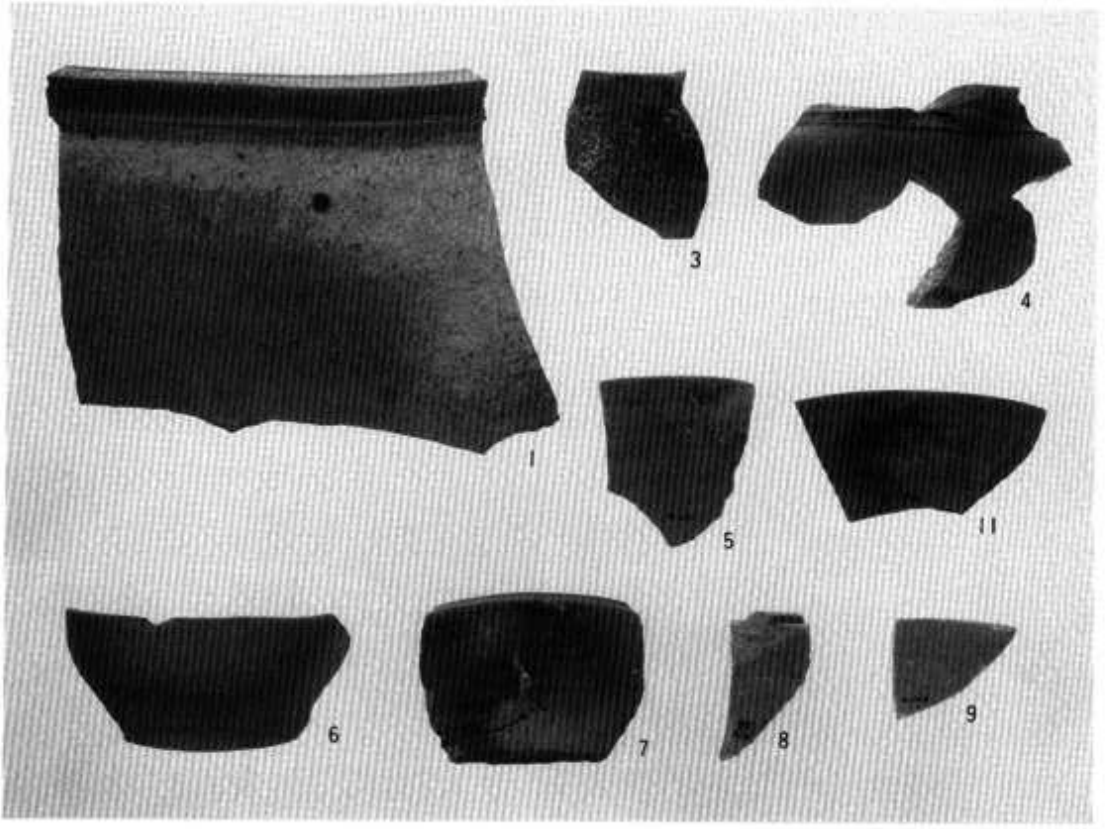
SZ1091（東から）

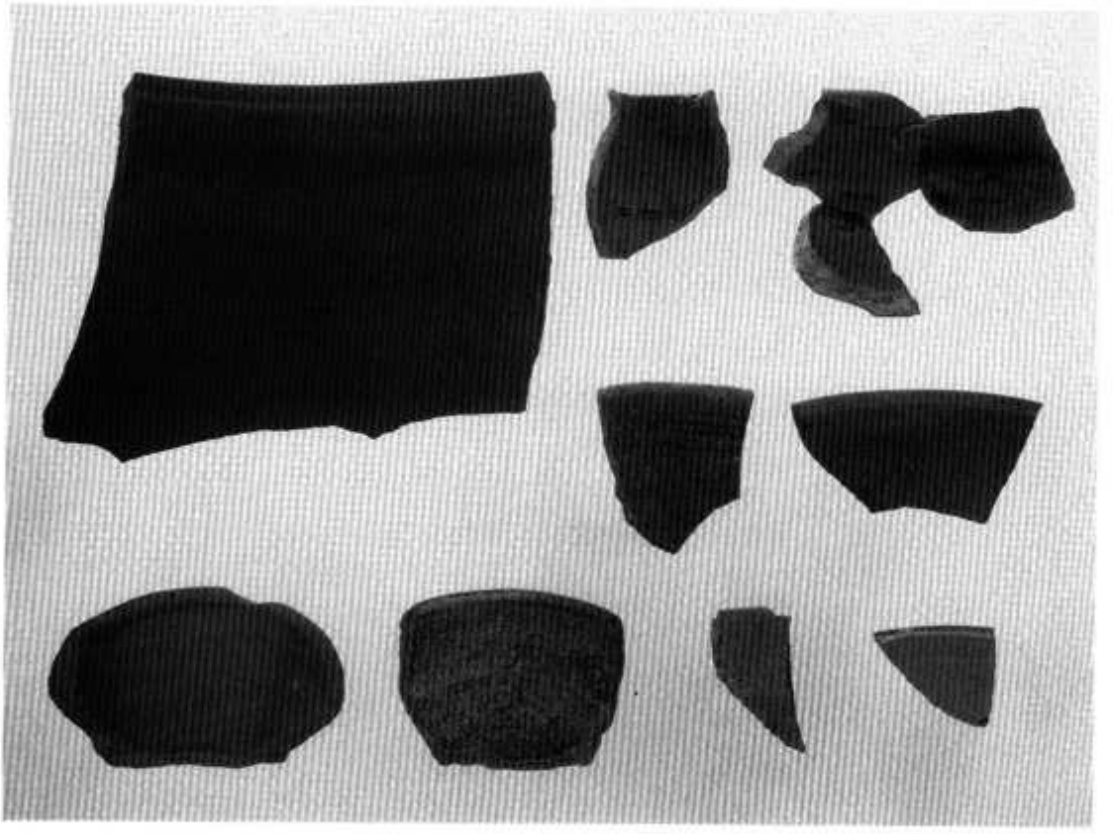


SI1084（東から）

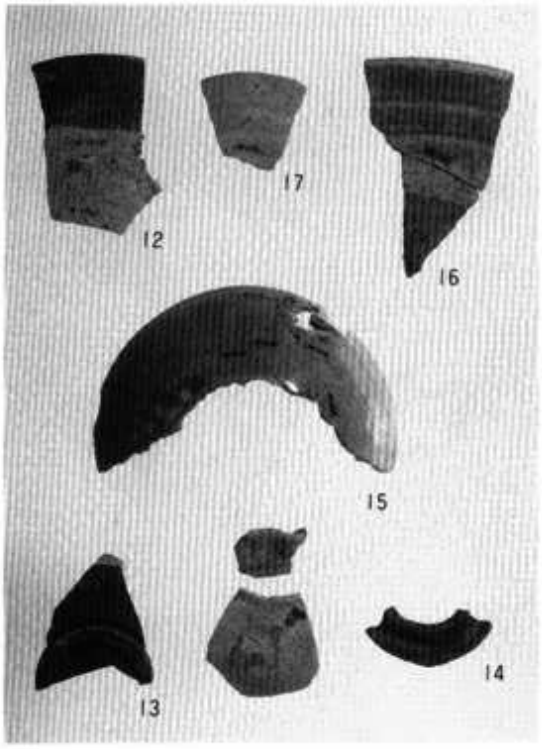
SE4211（北から）

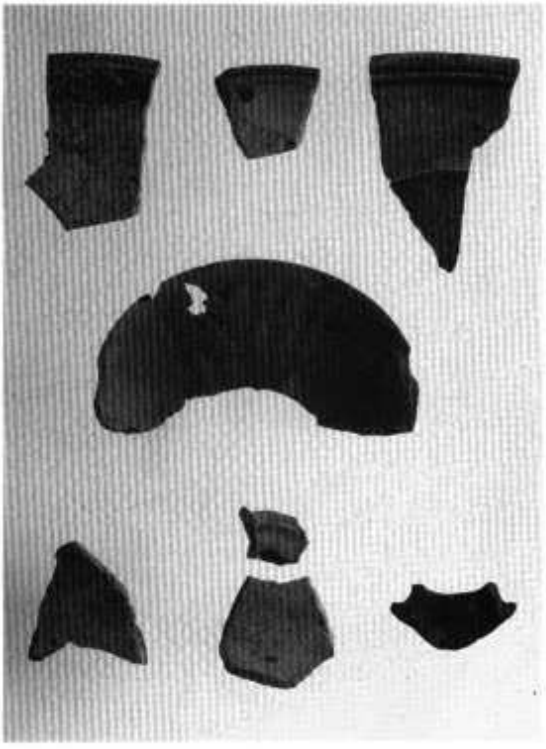
SF4212（北から）

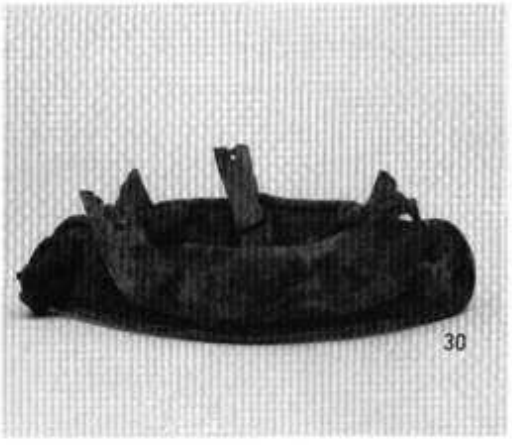




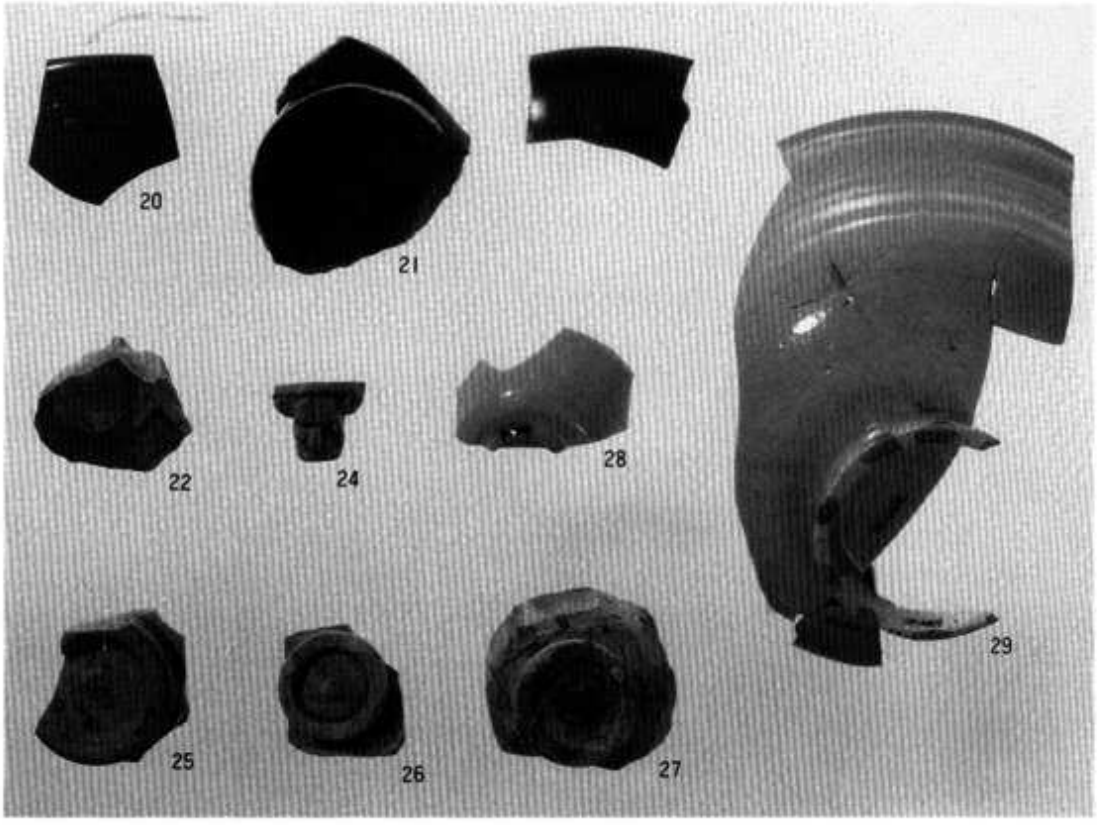
越前焼甕1　壺3・4　鉢5～7　擂鉢8・9・11

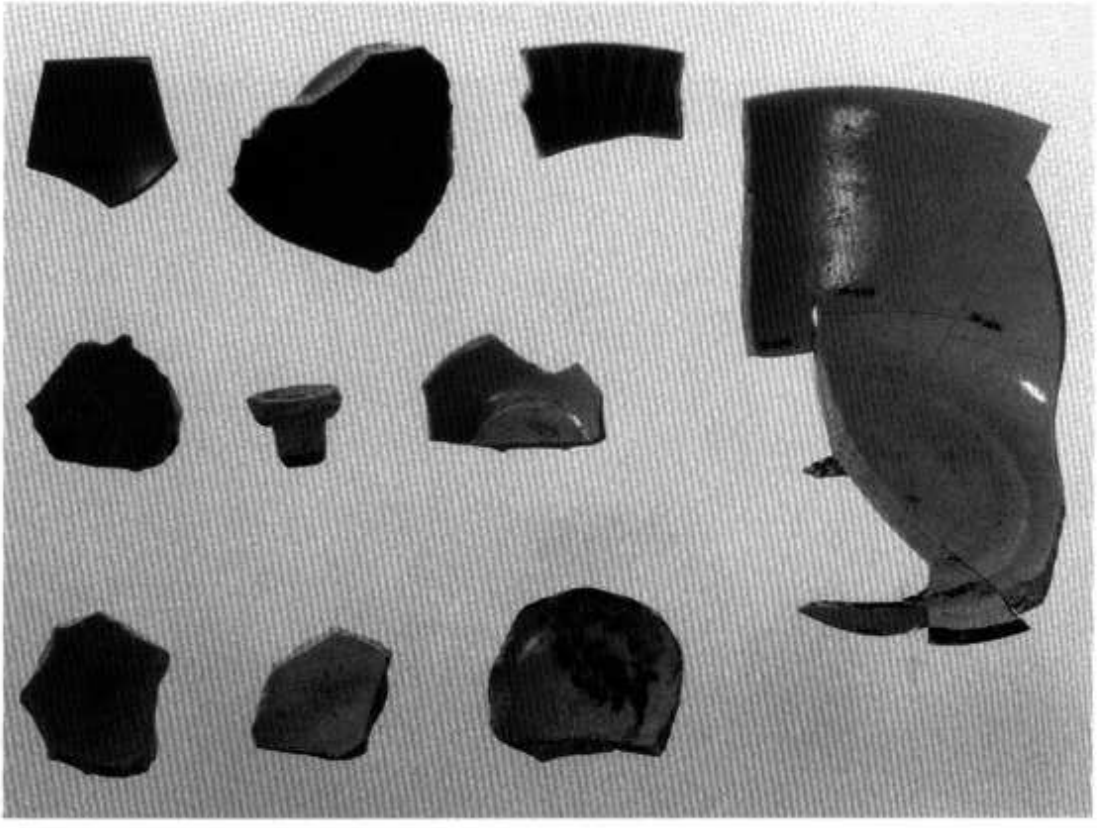






越前焼擂鉢10　**瀬戸・美濃焼**サビ釉鉢12　黄瀬戸碗13　鉄釉鍔釜14　灰釉碗15　同鉢16　同卸皿17
同小壺18　**瓦質土器**風炉19　**金属**眉庇と前立30　**その他**壁土31





青磁碗20～22　皿23　**青白磁**香炉24　碗25　**白磁**皿26　坏27・28　**朝鮮製陶磁器**白磁碗29

石垣状遺構（南から）

石垣状遺構（北から）

特別史跡
一乗谷朝倉氏遺跡
平成4年度発掘調査環境整備事業概要㉔

発行年月日　平成5年3月31日
編集・発行　福井県立朝倉氏遺跡資料館©
印　　刷　河和田屋印刷株式会社